

翻訳

ニコス・カザンザキス (1999) 『ロシア文学史』 アテネ  
\* Καζαντζάκης, N. (1999) *Ιστορία της ρωσικής λογοτεχνίας*, Αθήνα.

福田 耕佑 FUKUDA, Kosuke  
京都大学大学院文学研究科博士課程  
テッサロニキ・アリストテリオ大学哲学部客員研究員

訳者による序文

本稿は、現代ギリシア文学史を代表する作家であるニコス・カザンザキス による *Ιστορία της ρωσικής λογοτεχνίας* の第四章から第六章までの日本語訳である。先行する序文から第三章までの翻訳は、「福田耕佑 (2018) 「翻訳 ニコス・カザンザキス (1999) 『ロシア文学史』 アテネ」 『東方キリスト教世界研究』 2 : 32-60. 東方キリスト教圏研究会」で行い、その中でこの著作を翻訳することの意義を述べているが、ここでもかいつまんで簡潔に本翻訳の意義を述べておきたい。

従来ニコス・カザンザキスの文学並びに思想に関する研究は西欧思想とカザンザキスの関係に焦点を当てたものが多く、カザンザキスとロシアの関係はギリシア国内においても顧みられることが少ない。特にロシア文学史にはカザンザキスのロシア観とロシア文学から受けた影響が直接的な形で表現されているにも関わらず、諸外国語に翻訳がないばかりか、研究の遡上において正面から論じられることもなかった (Φιλίππιδης 2017: 143-180)。

だが本稿によるこの翻訳には無論カザンザキス文学研究における重要性があるばかりではなく、ギリシア文学研究の枠を超えたロシア文学研究における領域でもロシア文学が外国の文学にどのような影響を与えたのか、またロシア文学が外からどのように見られたのかを明らかにしてくれるという点で有益な資料の一つである。

本翻訳分の第四章には「ロシアの『欧州化』(1700 - 1800)」という名前が付けられ、ピョートル一世とエカチェリーナ二世の時代と文学作品の解説から成り立っている。そして第五章はロシアの浪漫主義について作品と時代背景が解説され、第六章ではアレクサンドル・プーシキンの生涯

---

1 Νίκος Καζαντζάκης (1883-1957) : 1883 年にクレタ島に生まれる。1906 年にアテネ大学法学部卒業後パリに留学し、ベルクソンやニーチェの哲学に触れる。12 年バルカン戦争に従軍し、17 年ヨルゴス・ゾルバスと共同で鉱山経営を行う (失敗)。19 年セフェリス内閣で厚生局局長として南ロシア、コーカサス地方のギリシア人難民の本国帰還支援に携わる。22 年ウィーンで仏教を、そしてフロイト研究を行う。次いで共産主義に傾倒し、三度にわたるロシア訪問を経て共産主義の限界を悟る。以降執筆と旅行に没頭。第二次世界大戦期はレジスタンス活動に従事し、独軍撤退後はソフリス内閣へ入閣する。48 年からはフランスに移住し、執筆に専念する。57 年フライブルクで客死。

と作品が取り上げられている。適宜ロシア語風での表記と、可能な限りキリル文字での表記及び原文を提示したいギリシア語を【】括弧によって記載している。

## 第4章

ロシアの「欧・州・化」【ΕΞΕΥΡΩΠΑ・Ι・ΣΜΟΣ】(1700 - 1800)

ピョートル大帝【Петр Великий】とその時代

ロシアはゆっくりと西方へ向かい始めた。その当時までは臆病で緩慢であったが、突然拍子【ρυθμός】を変えたのだ。ロシアの外的なヨーロッパ化はこれまでの歴史にないほど激しく起こった。アレクセイ・ミハイロヴィッチ【Алексей Михайлович】という優柔不断な改革者の息子であり、大帝という枕詞の付けられるピョートルが、西方世界とロシアを切り離していた長城を打ち破り、前世紀の習慣を覆して新しい需要をつくり出し、西方に向けて自身の広大な帝国全体を大急ぎで駆り立てていった。

新しい習慣を導入し、宮廷人と貴族たちの髭を切り、服装を変え、女性たちを家というハレムから解放した。祝祭と会合を制定して学校を開き、海軍を設立して常備軍を設置し、字母を修正し、書き言葉として話し言葉を課し、新しい印刷所を建設して非宗教的な書籍の印刷も許可した。組織を運営する能力を備えた人々や——主にドイツ人であるが——、教授、そして技師や士官、加えて建築家たちを集めた。

モスクワの東方的な雰囲気から脱するためネヴァ川の湿地に、広いヨーロッパ風の道路と太陽王ルイ十四世のヴェルサイユを模倣した中庭を備える宮殿で、庭と泉と巨大な広間を備える、フランス人建築家の手になるペテルゴフ【Петергоф】を有する、新しい首都を建設した(1703-1713)。1703年5月27日、ピョートルはペテルブルクを中心、ペトロパヴロフスクの要塞に礎石を据えた。急いでロシア中から何千もの建築家を招集し、何千人もの人々が疲労困憊と沼地の熱気に息絶えた。故にペテルブルクは「人骨の上に築かれている」という縁起の悪い評判が付きまとうことになった。

ピョートルは更に先へと進んだ。ロシアの民衆【λαός】が西方文明の真似事をするだけでは不十分なのだと言伝した。当の本人もヨーロッパ人たちが学んだことを学ばねばならなかったのだ。初めは模倣であっても、後には独力で創造を行うことができるようになった。皇帝自身がラテン語とドイツ語とオランダ語を学び、遊学して造船所【εργοστάσια】で働いた。多くの若者たちを勉学のために外国に派遣し、彼らの費用を出してやると共に彼らを監視し、彼らがロシアに帰国したときには厳しい試験を課した。

老人たちは反抗した。親たちは自分の子供たちが地獄の西方に行くのを見て嘆き悲しんだ。西暦1000年頃に自分たちの子供が新しい宗教に従って祖国を捨てるように強いられたことによって父母たちに嘆きが起こった時のように、この時も老人たちは反抗して呪いの言葉を吐き、皇帝を「反キリスト者」とみなした。

しかしピョートルの意志は堅かった。自分の理想を無理強いするため暴力を用いた。二百人の反対者が「赤の広場」において一日で斬首された。自分の革新的な業績に反対したという理由で我が子さえ殺した。ピョートルの遠大な目標は、ロシアが世界を統べるという雷帝イヴァンの目標と根底まで同じであった。しかし今やその中身は変わってしまっていた。この目標自体は宗教や修道院、またロシアの伝統によってではなく、西方文明へのロシアの順応によって達成された。ピョートルは実用を重んじる人であり、文学【φιλολογία】と修辞に関する著作には関心がなかった。学者たちに実用的な外国の文献を翻訳させ——幾何学、航海技術、数学、農学——、そしてもはや古い教会の言葉でなく、民衆【λαός】が理解できる単純な言語で書かせた。全ての地方【επαρχίες】に学校を開いたが、その目的はもはや教会を擁護したり神学者を輩出したりするためではなく、完全に技術を履修した若者たちを——公僕、士官、技師——輩出するためであった。

1703年1月2日、ロシアで初となる新聞の第一号が発刊された。皇帝は修正を課した。この新聞の特徴として、ジャーナリズム的な記事が初めて書かれたということが挙げられる。曰く、モスクワで四百の新しい砲台が造られ、「数学的航海技術学校」に三百人の学生が通い、カザン近郊に油田や銅山が見つかったこと等々。

若者たちが留学先のヨーロッパから戻って来たが、絶望の中にあつた年寄りの親たちにはもはや反抗する力もなく、脇に押しやられてしまった。そして皇帝の鉄の意志に対し古びて順応することのできないものは急激な流れが押し流されてしまった。

ピョートルと熱狂的に共闘した者は少数にとどまり、そのほとんどが外国人であった。ロシア人の最も優秀な者たちの内では高位聖職者であるフェオファン・プロコポヴィッチ【Феофан Прокопович】(1681-1736)が仕えた。聖職者ではあつたが、フェオファンは啓蒙的な頭脳を有し、狂信や迷信とは無縁であつた。彼の著述した『教会法』において、無目的で無気力な修道士の生活を極めて辛辣に批判した。青年期をポーランドのカトリック【καθολικό】の聖職者と密接な接触を持って過ごしたこともあつて教会統一への熱心な信奉者でもあつた。しかしローマに赴きヴァチカンを知った時に心の奥底から失望して、教皇に対し妥協を知らない敵となってモスクワに戻って来た。フェオファンは詩と演劇を書いた。ポルタヴァ【Полтава】の勝利(1709)への彼の称賛は印象的であり、ピョートルはフェオファンをペテルブルクに招聘し、彼と共に少数の友人たちを受け入れた。この若い高位聖職者はピョートルの政策の擁護者となり、聖職者の無知と不品行に対する闘争を引き受け、持てる力の全てをロシアの啓蒙に注いだ。彼は読書家で技芸を好んだ。三万巻の豊かな図書館を備えるネヴァ川沿いの美しい邸宅に、当時の選り抜かれた人士を招待した——タチーシチェフ【Василий Татищев】、カンテミール【Антиох Кантемир】、ロモノーソフ【Михаил Ломоносов】、ゴリツィン【Василий Голицын】、そして多くの外国人の芸術家と賢者たち。

彼は生涯に渡って学習と技芸への弛まぬ愛に奉仕し、科学的で文学的【φιλολογική】運動に精力的に加わり、詩文でもってカンテミールの最初期の風刺に応答し、熱心にロモノーソフを擁護した。フェオファンは、彼はプロテスタントであり、宗教的問題に関してあまりに自由すぎると

いう非難を受けた。彼が臨終の床で嘆息し「嗚呼、我が頭、我が頭よ。勉強のし過ぎで過ぎ酔ってしまったのだ。今になってどこで休もうというのか」と言うのを耳にした人もいた。

他に、この若い皇帝の特に興味深い信奉者に、イヴァン・ポソシュコフ【Иван Посошков】という農民がいた。彼は独学で学び、思想において驚くべき大胆さを備えた独創的な人物であった。ある日この天才的な農民は皇帝に『貧困と富についての本』【Книга о скудости и богатстве】という一冊の手記を手渡した。その中で彼の時代において初めて見られることとなった、次のような理論を主張した。国家が富を求めるのであれば、国家は市民たち【πολίτες】が豊かになるよう援助しなければならない。市民たち【πολίτες】は、民衆【λαοί】の創造的能力が自由な状態に置かれている場合にのみ豊かになりうる。ロシア民衆【λαοί】の発展を大きく妨げていたものは、その無学、泥酔、怠慢、裁判官の金銭欲、質の高い法の不足であった。ポソシュコフはあらゆる社会階層から代表者を集めるように提案した。これらの代表者たちが皇帝に全民衆【λαοί】の必要とするものを知らせてくれることであろう。ポソシュコフは鮮やか且つ色とりどりに、どれほど農民たちが大地主たちや重税に忍従しているのかを強調し、彼らの境遇【τύχη】を改善させるための策を示した。耕作人に多くの土地が与えられればよいというものではなく、民衆【λαός】が教育され豊かになれば生産性は向上するだろう。

この作品を更に重要ならしめているものは、ポソシュコフが新しい世代に属しているわけではなく、ピョートルよりも二十歳年長で、彼がもたらした喫煙や舞踏、そして演劇に出かけるという西方の習慣と戦っている人物でさえあったということである。しかし皇帝は彼に吃驚し、ロシアに教養を積ませて蘇らせなければならないという点には同意の念を示した。このような事業は不可能なものではないが大きな困難を伴うものだと考えていた。「十人の同志と共に皇帝は全ロシアの重責を担い、この山を登る。だが何百万もの人々が彼を後ろに退かせようとする。どうすればこの事業が成就されようか？」

皇帝は注意深くこの貴重な手記に目を通したが、数か月後に崩御してしまった。ポソシュコフが告発した「高貴な人物たち」はこの大胆な農民【μουζικό】を逮捕し、ペトロパヴロフスクの牢屋に放り込み、彼は当地で没した。

改革期の文学的【Φιλολογική】生産。——偉大な改革者皇帝の時代に多くの文学的【Φιλολογικά】作品を残すことは不可能であった。この国の精神的権力者たちは急速な刷新的事业に身を捧げ、偉大な重要目標に服従した。つまり、ヨーロッパの技術を知ること、実践的な需要に関わる作品の翻訳、若者たちを教育し西方文明という血を輸血すること。わずかな文学【φιλολογικές】者だけが改革的熱気に満ちたこの時代に頭角を現すことが出来た。しかしピョートルの治世最終年に差し掛かり、彼の崩御後まもなく興味深い先駆的な人士たちが精神的な運動や科学と文芸の分野に登場した。

最初の歴史家タチーシチェフ、新ロシアの最初の詩人カンテミール、ロシア語を形成したトレリアコフスキー【Василий Тредиаковский】、最初のロシア人劇作家スマローコフ【Александр

Сумароков】，そして最後にこれらの内で最も偉大な人物であり，多彩な分野における復興を担った天才，ロモノーソフである。

1. ヴァシーリー・ニキーチッチ・タチーシチェフ【Василий Никитич Татищев】(1686-1750) は上級外交官や政府官僚を務めた。多くの旅行で西方文明をよく知り，外面や技術面のみならず，彼の思考と生き方においてまで深くヨーロッパ化された初期のロシア人の一人である。タチーシチェフは技術だけでなく，博物学，絵画，歴史，哲学も学んだ。ロシアに帰国した時，何らの精神的運動も存在していなかったオレンブルクに任じられた。彼は退屈極まり飲酒を始めた。飲酒が彼の唯一の慰めであり，「よく考えている者はよく報いられねばならない」——つまり飲まねばならない，と言うのが常であった。酩酊により彼は不品行に走るようになり，絶えず問題を引き起こし，最後には罷免された。彼はストックホルムに避難したが，再び招聘されアストラハンの知事に任命された。だがそこでも飲酒と問題行動を起こし始め，告発され無罪放免とされたが，弁明の翌日には死んでしまった。死を予見していた彼は，入念に準備を行っていた。家財を清算し，馬に乗って墓地に出かけて自分の墓を掘るように命令し，棺に横たわり友人たちと静かに語りながら死んでいった。

彼の作品は全て奔放な彼の生涯を反映している。どの本も初めは情熱をもって書き始めるのだが，完成させる力は持ち合わせていなかった。その中には歴史と地理の辞典，ロシアの地理書等があった。全て未完成のまま放置された。『遺言』【Духовная】という作品において，哲学研究を勧め，それを世俗的教養と宗教的教養を区別した。民衆【λαός】を無知の暗闇の中に打ち捨てたままにしていた教会の代表者たちを激しく非難した。タチーシチェフは，ロシア救済のための道は一つしかないことを確信するに至った。つまり民衆の教化【να μορφωθεί ο λαός】である。彼は市民【πολίτη】の生涯を兵役，政治参加，耕作の三つの期間に分けるよう勧めている。

五巻からなる『ロシア史』【История Российская】は純粋に体系的な分類であり，史料に対する批判的な研究である。しかし導入に見られるように，タチーシチェフは歴史の背景というものの目的と義務をよく知っていた。歴史に関する作品を広い意味で理解していた。国土で繰り広げられるあらゆる生，民衆の習俗と習慣，宗教，言語そして掟を克明に描いている。タチーシチェフの歴史研究はロマノフ家が玉座に上ったところで止まっている。曰く，最新の歴史を記述するのなら，多くの悪事が暴かれ，貴族たちが彼を赦すことがありえないからであり，また悪事を黙っていたとしても，歴史の義務がその覆いを取る——真実を語るに違いないからである。しかし余りにも用心深かったため，タチーシチェフの作品は，この著述家の死後何年も経なければ印刷することが出来なかった。四巻までが1768年から84年までに，そして第五巻が1848年に出版された。

2. ピョートル大帝の死後に改革熱は冷めてしまった。しかし皇帝の宮廷と指導者階級においては西ヨーロッパの生活様式と習慣が模倣され続けた。かつら，西欧の服装 (φράγκικες στολές)，舞

踏, 上辺だけの教育。民衆【λαός】には全く関係のない話であった。教養層と民衆の間の断絶はますます深くなっていくばかりであった。古い習慣は地に落ちたが, まだ新しい習慣も定まった形を有してはいなかった。この外国文化の模倣は粗野で不格好なものであった。だが風刺にとっては輝かしい時代でもあった。まさにこの時代にロシア第一の詩人であり風刺家のアンチオフ・カンテミール公【Антиох Дмитриевич Кантемир】(1708-1744)が現れたのだった。

カンテミールはモルダヴィア公の息子でイスタンブルに生まれた。科学アカデミー【η Ακαδημία των Επιστημών / Академия наук】が創設した最上の学校で教育を受けた者の一人であった。若くしてパリのロシア大使となり, そこで多くの著述家と知り合うようになり, モンテスキューの『ペルシア人の手紙』やフォントネル【Bernard Fontenelle】の『世界の多数性についての対話』【Entretiens sur la pluralité des mondes】の翻訳を試みた。

カンテミールは彼の時代のどのロシア人よりも深く西方文明を理解していた。しかし強力な創造的個性は有しておらず, 自身の思想の中に完成された形を与えることは出来なかった。彼はピョートル大帝を主人公に据えた大叙事詩『ペトリダ』【петрида】を書こうと企図した。しかし叶わず, 自分が詩の中で唯一得意であった風刺に舞い戻った。「読者にもはやあくびをさせることないように私は風刺を書くのだ。こうして, 私は將軍のように, 勝利を手にすることだろう。」

カンテミールの風刺は, 生命力に溢れるロシア語にはもはや適応できないような, 単調で長々と音節を重ねる詩行で書かれている。ホラティウスとボアロ【Nicolas Boileau-Despréaux】を範に, カンテミールは勇気と精神をもって, 無知と迷信, そして同時代人たちの隷従と闘った。最良の風刺である『学習を誹謗する人たちへ。自分の知性に向けて』【На хулящих учения. К уму своему】の中で, 当時のロシア社会のいくつかの典型を生き生きと描写している。例えば学びと「死せる友人たち」, そして書物は軽蔑して陽気な飲み友たちの方を好む酔っ払い。またあらゆるラテン人作家【ολούς τους Λατίνους συγγραφείς】よりもおもしろいやかつらの方を好む洒落好き【λιμοκοντόρο】。古臭く時代遅れな貴族たちに賄賂を受け取る裁判官, 単細胞な司祭たちに悪辣な商人たち, そして卑屈なおべっか使いたち。

しかしタチーシチェフのように, 同じくカンテミールも彼の同時代人たちに何ら影響をもたらすことがなかった。彼の作品は手書きの形でしか流通せず, 彼の死後何年も経ってから印刷されるに至った。

3. ヴァシーリー・キリーロヴィチ・トレジアコフスキー【Василий Кириллович Тредиаковский】(1703-1769) はアストラハンに生まれ, 司祭の息子であった。学問への欲求が余りにも高かったため, モスクワ, オランダ, そしてパリに留学した。ペテルブルクのアカデミーで修辞学の教授に任命され, 礼儀作法も知らない専制的なアンナ【Анна Ивановна】の宮殿で宮廷道化師と共に貴族たちに気晴らしを提供した。ロシア社会の見せかけの教養階級に未だ優勢であった未開さの証左とも言える, 不運なトレジアコフスキーが辛酸を舐めさせられた恥辱は筆舌に尽くしがたい。ある日皇妃の大臣が, 何かの祝祭に合わせた詩を書かせようとトレジアコフスキーを

呼び出したことがあった。大臣は、まず詩人に平手打ちを喰らわせ、次いで棒で殴りつけ、最後に、翌日朝までには詩を用意しておくようにと付け加えて牢屋に放り込め、と命令した。トレジアコフスキーの背中では鞭【кнут】によって腫れ上がってしまい、空腹と恐怖で死にかかりながら、翌日道化師の衣装を身に纏って詩を送った。

トレジアコフスキーはあらゆる恥辱を乗り越え、自分自身の価値を大いに信じて精力的に活動し、未開で無教養な環境に身を置きながらも偉大な忍耐と能力を示した。彼の詩才を感じる事が出来た者は極めてわずかであった。彼が恋愛と三つの賜物について語る時には、これらと聖三一には全く何の関係もないのだということを説明せねばならなかった。

トレジアコフスキーは詩人としては極めて平凡であった。何の才能を感じさせず面白みのない詩や頌歌、そして哀歌を多く書き、フェネロン【François Fénelon】の『テレマックの冒険』【Les Aventures de Télémaque】にヘクサメトロス調の韻律を施し、『テレマヒーダ』【Телемахида】という大叙事詩を書こうと試みたこともあった。

トレジアコフスキー唯一の功績は、書き言葉の創出と、新しい言語的必要によりよく叶う新しい詩行創造への尽力に存する。しかしながらロシア語というのは民衆的な特徴、古典教会語、フランス語の語彙、ポーランドとドイツ、そしてラテン語の語彙といった不揃いな要素が乱雑に混ぜ合わされたものであった。トレジアコフスキーはロシア語を純化させ、ロシア語にロシアという単一の特徴を与えようと企てた。1753年に「ロシア語友の会」が設立され、トレジアコフスキーはその開会の言葉を宣言し、初めて正しい文法の必要性を強調しながら「ロシア語の純化」について語った。

またトレジアコフスキーは、ポーランド人たちの音節とロシア語の精神が一致しないのだということを、民衆歌を研究しながら理解した初めての人だった。ロシア詩が強勢の置かれる音節と強勢の置かれない音節に基づいているに違いないということを初めて発見したのは彼である。この二つの明晰な努力が、トレジアコフスキー個人にのみ帰せられる功績である。

4. アレクサンドル・ペトローヴィチ・スマローコフ【Александр Петрович Сумароков】(1718-1777) はロシア演劇の父である。彼の最初の歌はアレクサンドラン韻の『ホレブ』【Хорев】(1749)であり、大きな成功をおさめた。彼の演劇への愛が広く知られるようになり、あらゆる地方から俳優の勉強をするために若者たちがやって来た

ヴォルコフ (1729-63) 【Фёдор Григорьевич Волков】はヤロスラヴリ【Ярославль / Γιаросλάβ<sup>2</sup>】の若い商人で、ペテルブルクで見た演劇に大いに熱中し、兄弟と何人かの友人たちと一緒にあって生まれ故郷の街に劇団を作り、スマローコフの作品に加えて、宗教劇やヴォルコフ自身が翻訳した外国の作品を上演した。その噂はペテルブルクにまで届き、女帝エリザヴェータ【Елизавета Петровна】によって、彼女の劇場で演技するために劇団全員が招聘された(1752)。上演が好評を

2 Καζαντζάκης 1999: 75 カザンザキスは Γιаросλάβ と記しているが、ギリシア語でも実際には Γιаросλάβλ であり、彼の誤記である可能性が高い。

博したので、女帝は彼らがアカデミー【Петербургская академия наук или Императорская академия наук】で教育を受けることが出来るように計らい、1756年に勅令によって「悲劇と喜劇上演のためのロシア劇場」【Русский театр для представлений трагедий и комедий】が建設された。

この劇場でスマローコフが支配人に、そしてヴォルコフが「第一俳優」に任命された。彼らだけが作品を書くか、或いはラシーヌ、モリエール、ヴォルテール、そしてデンマークのホルベア【Ludvig Holberg】の翻訳をしもした。

スマローコフの作品は、その内容がロシア史から取られたという理由においてのみ価値がある。その形態は外国の演劇の奴隷模倣である。キエフの土台を建設した者が彼の処女作の主要な主人公であり、彼の二作目の歌には基調として、ノヴゴロドの住民がヴァリャグを呼んだというロシアの伝統があった。三作目の作品には偽ドミトリー帝の歴史が引用されている。これら全ての作品に詩的な価値はない。これら全ては雄弁術であり、空虚な長広舌であった。「私は未開人であり、頭の天辺から血を浴びている！」——「私は唯一の専制者になりたい！——望むだけあなたは徳の中にまどろむがいい——私は地獄を恐れない！」

しかしスマローコフの作品は、その形態がその当時流行の偽古典であり、内容が民族的【εθνικό】であったので、好評を博した。ロシア人たちは舞台上に偉大な英雄たちを喜んで見ている。スマローコフは格言を愛し、しばしば政治や倫理、そして社会に関する思想を表現した。自由を愛好する思想を伝え、農奴制に対する抵抗の声を上げた。

人間を家畜のように売り払ったりせず、賭けごとで国家の財産を失うようなことが起こらない外国から戻って来る、渡り鳥を生き生きと描いた。しかしこの鳥は喜んで帰って来て、古いロシアの白樺の枝に巣をつくるのである。

大本の原型はヴォルテールにある。スマローコフは彼に追いつくことが出来るよう超人的に働いた。しかし彼の能力は限りなくヴォルテールに劣っており、周りの人間たちも低俗で教養不足だった。年に五千ルーブルの補助を受けていたが、演劇の必要経費だけだったというわけではなく、その職責分として四分の三はただで受け取っていたに相違ない。聴衆は原始的であり、上演の間でも叫び声を上げ、食べ物を食べ、作品には興味がなくただ俳優たちの衣装に関心を示しただけだった。

スマローコフの一生は高慢と神経質そして失望に満たされていた。絶えず女帝に不平を鳴らし、彼女は彼に「情熱のりを見るのなら手紙の上ではなくて、舞台の上で目にしたいものです」と答えたものだった。彼はヴォルテールに手紙を書き、彼の作品を送った。狡知を極めたこのフェルネー【Ferney】の総主教は彼に、スマローコフの自己愛を更に高めてやるべく山のように言葉を送った。

5. ミハイル・ヴァシーリエヴィチ・ロモノーソフ【Михаил Васильевич Ломоносов】(1711-65)は前古典期の比較にならない程卓越した知識人であった。新生ロシアで最初のこの偉大な精神的英

3 Ἰδομενέως 2006: 61 ここでの「天辺から」はクレタ方言の αλοκορφής である。

雄は博物学的な歴史家であり言語学者であった——プーシキンが名づけたように「ロシア初の大学」に相応しかった。ロシアで初となる化学実験所を設立し、フランクリンとは独立に雷の電氣的な性質を発見し、そして初めて石炭と電気の植物的な本質を明らかにした。また同時に新しいロシア語に初めて韻文と散文の言葉の規範を与えた。

ロモノーソフはアルハンゲリリスク治下の白海の貧しい漁師の息子であった。十九歳まで彼自身も漁師であった。イヴァン・シュブヌイ【Иван Шубный】という農民が彼に書を教え、教会の朗読者となった。こうして青年ロモノーソフは教会の言葉を知って愛するようになり、宗教的感覚を潤した。だが『オクターブ』【Октава】と基本的な算術を会得するやすぐに小さな村を出て学びたいという欲求に駆り立てられた。教師も貧しかったが、彼に三ルーブルと暖かい外套を与え、ロモノーソフはモスクワに出立した(1731)。大都市の凍てついた道を歩き廻っていた。一月は家のない状態が続いた。路上で寝、飢えに苦しんだが、最終的には食いつなぐためにアカデミー【Славяно-греко-латинская академия】で何とか一日三コペイカを受け取れるようにはなった。ものを書くということや学ぼうという考えに至るのに余りにも時間がかかったため、五年間見習いを務め、同窓生たちがあざ笑うのも気かけず馬車馬のように働いた。裕福な花嫁の待つ村に戻って来てはどうかと言う同郷人の助言にも心を惑わされなかった。餓死することになっても学ぶことのできたモスクワに留まる方を選んだのである。

ロモノーソフは最も優秀な生徒の一人に選出され、学業を完成させるためドイツに派遣されることとなった。恐ろしい困窮の中でもあらゆる類の人文科学研究に貪欲に没頭した。借金の故に投獄されたが釈放され、飢餓に苦しみ絶望しながらドイツを巡った。軍隊に入隊したが脱走しロシアに帰って二年間職を探したが無駄だった。最終的にはアカデミーの自然科学の教授に任じられた。それ以降ロモノーソフの偉大な活動が始まった。ペテルブルクのアカデミーは、ピョートル大帝の時代よりドイツの知識人の手に落ちていた。彼らがアカデミーの絶対的な管理者であった。ロシア人に対し横柄で無礼に振舞い、現地の教授の任命を避け、常にドイツから後任の人物を招聘していた。

ロシア人のキリル・ラズモフスキー【Кирилл Разумовский】が学長に任命されて初めて、ドイツ人たちの全能のような権力にも制限が加えられた。ラズモフスキーは当時十八歳で、彼の任命に関しては、女帝エリザヴェータによって非常に愛された、美男子で聖歌隊員の兄弟アレクセイ【Алексей Разумовский】に依るところが大きかった。ラテン語とロシア語が正式のアカデミーの言語として制定され、ロシア人たちも教授に任命された。五年後ラズモフスキーはコサックの棟梁【архηγός / гетьман / гетман】になり、彼の地位にはロシア人貴族で芸術庇護家のシュヴァーロフ【Иван Шувалов】が任命された。シュヴァーロフは当時尚蔓延していたドイツ系知識人たちの凶々しさを抑制するために、ロモノーソフを学院の教授に任命した。

ロモノーソフの夢は、ロシアが速やかにヨーロッパの後見から独立することであった。人間理性に絶大な信頼を置き、燃え盛る愛国心と手の付けられない程の自尊心で燃え上がっていた。アカデミーに入るとすぐにドイツ人同僚に対し激しく食ってかかった。ロモノーソフの容姿は巨体

の運動選手のようにであり、飲み始めるとしばしば思想上の対立が肉体的な衝突に変わってしまうのだった。

教授としてロモノーソフはしばしば聖人祭の祝詞を宣言した。この祝詞は学問的なロシア散文初の模範である。学問的なロシア語はまだ存在していなかった。無教養な大衆に困難な学問的主題をより近づきやすいものにするため、ロモノーソフは話し言葉を学問的表現の道具にまで高めなければならなかった。ロモノーソフは言語研究を極め、高名な『ロシア語文法』【Российская грамматика】を執筆した(1755)。極めて懸命にスラヴ語とロシア語という二つの言語に境界線を引いた。同様に異なる特徴を示し、汎ロシア的な書き言葉の基礎として、最も明晰で豊かな言葉としてモスクワの特徴を定立すべきだと主張した。だが新しい言語理論は極めて明晰な彼の言語理解を陰らせ、ロシア文献学【φιλολογία】に悪い影響を与えた。ロモノーソフは文体を三つに分割した。これによって叙事詩の書かれるべき、スラヴ的単語で満たされている「高い文体」、風刺や牧歌や哀歌等の歌や頌歌の書かれるべき「中間」の文体、そして喜劇や物語また書簡等が書かれるべき「低い」文体である。

アカデミーは宗教と皇帝に関する大祭と戦勝記念日において頌歌と祝詞を著すよう義務付けられていた。この外的な契機によって極めて多くの頌歌が、ボアロとドイツ人ギュンター【Johann Christian Günther】を範としてロモノーソフによって生み出された。ドイツからロシア語の韻律に関する論文と共に処女作となる頌歌を送った(1740)。この頌歌はたちまちロシアで話題となったが、当時詩人はドイツで借金に苦しみながら、妻と二人の子供たちと共に飢餓に耐えていた。ロモノーソフの頌歌には詩的な息遣いがほとんどなく、知恵文学的な寓話と冷淡な格言が詰め込まれたものであった。プーシキン【Александр Пушкин】はいみじくもこういった。「ロモノーソフはロシアで初の大学ではあるが、この大学においては詩と修辞法の教授は几帳面な僕であるにすぎず、神に愛された詩人でもなければ着想豊かな修辞家というわけではないのだ」

しかしながらロモノーソフは詩においてやはり重要人物であり、新しい道を切り開いた。新しいロシア語の本性に一致するような強弱の拍子でロシア語の韻文を実際に書いた第一号はやはりロモノーソフである。何の注文もなく書いた詩には偉大な詩的才能が見受けられる。多くの詩作によって太陽、北極の夜、北方の故郷の静寂と雄大さを描いた。これらの頌歌故にロモノーソフは「ロシアのピンダロス」と綽名されたのである。

ロモノーソフの詩歌は中身【λόγος】の面では失格である。ただその文体と言語がロシア文学【στη ρωσική φιλολογία】において重要な位置づけにあるのみである。彼の年代記の伝説から影響を受けた歴史作品を批評しようと思う者もない。翻って、光の伝達と石炭の精製に関する科学研究は特に大きな価値を有するものである。

多才な知性で【νοῦς】、強く好戦的な性格、博学で先駆的であったロモノーソフは、疑いの余地なくロシア・ルネサンス初期の最も偉大な精神的人物【μορφή】であった。ロモノーソフは一国の文明の英雄期に——偉大な情熱が迸り、子供のような純真さとしてしばしば天才的直観をもって理性が飽くことなく人間の知のあらゆる諸分野に注がれる道の開かれた偉大な熱狂の時代に

—— 属する人であった。

#### エカチェリーナ大帝【Екатерина Великая】とその時代

十八世紀中頃より西方文明の影響は更に大きなものとなった。しかし性格には変化があった。ピョートル大帝とその直接の後継者たちの時代には西方文明は主にドイツから流入し、当時は技術と実践に関する内容のみであったが、今やエカチェリーナ大帝(1762-1796)の時代になるに及びフランスの影響が強まって支配的になり、百科全書派のフランス人たちの自由を愛好する姿勢をもった諸思想がロシア教養層に生き生きと伝わった。ルソーと特にヴォルテールの著作が熱心に翻訳された。人民主権【κυριαρχία του λαού】、国王と民衆の間での契約説、人類の平等、自然現象に対する批判的分析。もちろんこれらの新しい思想は、—— 故に表層的でただ理論的でしかありえなかったのだが —— ペテルブルクとモスクワの上流社会層にのみ触れることのできるものであった。民衆【λαός】は恐るべき無学のただ中に取り残され、村落の隷従は変わらず残酷に続いていき、皇帝の全権と専横がこれに続いた。新しい思想は、サロンでのお喋りと知識人たちの危険とは無縁な書き物のための、人目を惹く装飾品でしかなかったのだ。

出自をドイツに持ち、ロシアを半世紀治めた女帝エカチェリーナ二世はロシア文明史において例外的な重要さを有している。広範に渡る哲学的教養を持ち、フランスの百科全書派の生徒であってルソー、ヴォルテール、ダランベールの称賛者であり、ディドロの窮乏を助けるために彼の蔵書を購入し、ヨーロッパの有名な哲学者や作家たちと定期的に文通を行っていた。ピョートル大帝の事業を継続し、広大な農民国家【μουζικήκη χώρα】をヨーロッパ化することを人生の目標にしていた。ピョートルよりも更に一步步を進めたかったのだ。もはやロシアにただ技術や科学文化をもたらすのみならず、哲学と文芸、そして芸術でもってロシアの魂を文明化しようと企てていた。彼女の称賛者の一人が、「ピョートルがロシアに肉体を与え、エカチェリーナが魂を吹き込んだ」と言ったがこれは正鵠を射た発言である。

エカチェリーナは文芸を擁護しただけではなく、彼女自身も文人であった。彼女の第一作目は全ヨーロッパに印象を残した。それは詩歌の作品ではなく、新しい民法典を起草するためにモスクワに集まった新法典編纂委員会【Уложенная комиссия】(1767)の成員に対する『訓令』【Наказ】であった。この『訓令』の大部分は、ベッカリーアとモンテスキューから靈感を得たというがむしろ書き写したものであり、彼女自身がダランベールに書き送った手紙で告白しているように、徹底的に彼から盗作している。「ですが、こうして何百万もの魂が救われるのですから、彼がエリュシオンから私を見て私の盗作を許してくれることを付け加えてくださるようお願いしています」。しかし一年後、自由主義的な哲学思想というのが思想家の頭にはよくよく魅力的なものであろうが、実用性の面では特にかくも遅れている民衆に適応させるのが困難だと見て取ったので、エカチェリーナはこの委員会を解散してしまった。後にヴォルテールとルソーの生徒は、かつて自分自身が擁護し適用しようとした極端な自由主義思想と戦うようになった。

この『訓令』から多くの自由主義的な知識人たちが勇気をもらい、もはやうことなく公然と自分たちの政治や社会に対する意見を印刷し始めた。私たちは、凡そ十年程でロシアのジャーナリズムが開花するのを目にすることになる。十六ほどの週刊誌が出版され、主に風刺と倫理学で、物を読み教養を積みたいと願う公衆が既に生まれ始めていたということをも明らかにしてくれる事実である。これらの部の一部である「ありとあらゆるもの」【Всякая всячина】は実際エカチェリーナ自身が指揮を取ったものであり、文章の大部分を一人で書いていた。これらのあらゆる週刊誌においては、主に批評的かつ社会的な増進を持ってロシアの読書公衆の倫理的・精神的な水準を高めるといった教訓的な主題が保持され続けた。

しかしエカチェリーナはただジャーナリズムの枠だけに収まりはしなかった。自身の新しい思想を広め、民衆【λαός】を演劇作品でも啓蒙しようという野心を抱いていた。純粋にロシア的な内容のものばかりではなく、フランスの演劇技術の奴隷的な模倣や生き生きとした対話、粗雑ではあるが正確な人物描写でもって多くの喜劇を書いた。作品の全ての中で、表層性や放蕩、貴族たちの過度な喜劇好きに加えて、ロシア民衆の反動性と諂い、そして極端な敬虔と闘った。

エカチェリーナの主要な喜劇には、『嗚呼、なんという時代！』【О время!】、『詐欺師』【Обманщик】、『扇動者』【Смутник】、『シベリアのシャーマン』【Шаман Сибирский】がある。エカチェリーナは至る所で、ロシア上流階級の間でその数を増し、民衆の解放のために闘っていたフリーメイソンに対し圧力を加える機会を探していた。自分の手を逃れていた神秘主義的な組織というものに耐えられなかったのだ。彼女の下だけから、自身の専制的な監督下で啓蒙のプロパガンダが展開されることを望んだのだ。

ヴォルテールが「北のセミラミス」と呼んだように、エカチェリーナは大胆にも見せかけの浪漫主義的な性格を与えてシェイクスピアの歌を翻案した。

『リユーリク』【Из жизни Рюрика】や『オレーグ』【Начальное управление Олега】等の詩的な価値は最低限のものである。しかし女帝の文学【φιλολογικά】的エッセーは、女帝がこれらの中で国家と社会に対して自分の自由主義的な思想を述べ伝えているが故に興味深いものである。むしろ哲学的な観点から、エカチェリーナはスマローコフよりも一歩前進している。というのも、かなり不完全ではあるにしても、ロシア史の過去の栄光に満ちた時代を表現しようとしたためである。これらの作品において、エカチェリーナ自身がこの時代に教養人たちの好奇心をくすぐり始めていた民俗学的研究【τις λαογραφικές έρευνες】への自分自身の興味を強調しながら、民衆舞踊【λαϊκούς χρούς】と民衆歌【δημοτικά τραγούδια】をも取り入れている。

女帝の文章が劇作品にのみ限定されるということではなかった。多くの童話、物語、子供のしつけのための模範等を著した。決して韻文は書かなかった。彼女の作品に散りばめられているものは、彼女の作品のロシア語の文体や正書法上の誤りを修正した学者たちによりなったものである。彼女の作品の多くはフランス語で書かれたが、彼女お抱えの文法学者がロシア語に翻訳した。

エカチェリーナはロシアの精神的な発展に大きく寄与した。ピョートルがただ外面的な西方文明を導入して主に実用性の面で民衆【λαός】を涵養しようとしたのに対し、エカチェリーナは、哲

学的思想を移植し、民衆に芸術に関心を持ちこれを愛するように教え、そして百科全書派のフランス人の自由主義的な政治社会理論をその上に芽吹かせようというという野心を抱いていた。しかしこれらの思想がフランスで取り返しのつかない果実を結び、玉座を打ち壊した大革命が勃発するや否や、エカチェリーナは恐怖心を抱いて自由を憎む専制君主となり、もはや言論【λογού】の自由を許容せず、自由な精神を国外に追放して弾圧した。ロシア知識人たちの殉教が始まったのだ。

ニコライ・イヴァノヴィチ・ノヴィコフ【Николай Иванович Новиков】(1744-1818)は士官であり、次いで民法典起草のための委員会の書記になった。1769年に週刊誌『雄蜂』【Трутень】を創刊したが検閲によってすぐに禁止され、二つ目を創設したが、ノヴィコフが極端に自由的な語り口でロシア社会の野蛮さと無学さ、貴族たちの麻痺した習慣、そしていかに裁判官と官僚たちが賄賂を受け取り、大地主がどれほど非人道的に農民たちを搾取しているのかを告発したために、これもただちに休刊となった。農民【του μουζίκου】の生活に加え領主たちの貪欲さと残虐さを紙面が真っ黒になるほど描写した。

ノヴィコフは模範的な勇敢さをもって民衆【λαό】を啓蒙するため戦った。『古ロシア図書館』【Древняя российская вивлиофика】を出版し(1773)、フリーメイソンのストアに入会して彼を金銭と精神的な協働でもって助けてくれる幾人かの熱心党の「兄弟たち」と極めて体系的に民衆を啓蒙しようと計画した。モスクワ大学の印刷所を借りて精力的に印刷によるプロパガンダを開始した。1782年、主に教科と教養に関わる本を出版し普及させるために「人文社」【Дружеское ученое общество】を設立した。友人のヨハン・シュヴァルツが経営する「人文塾」【Переводческая или Филологическая семинария】で学生は外国語から科学的に啓蒙的な本を翻訳する技術を学んだ。多くの地方に「人文社」の本を普及させるために本屋が建てられた。モスクワでノヴィコフは、望む人は誰でも無料で本を読んだり借りたりすることのできる読書室を始めた。モスクワ大学の印刷所で三年間の内に先行する二十四の出版物よりも多くの本を印刷した。

ノヴィコフは初となる子供向けの新聞、『子供読本』【Детское чтение для сердца и разума】も出版した。また教養的で自由主義的な傾向を持つフリーメイソンの本も多く出版した。

女帝はこの自身の監督下で行われていない精神的な運動に不安を感じ疑いを抱いた。モスクワ府主教プラトン【Митрополит Платон II】にノヴィコフの宗教上の所信を査閲するように命じた。府主教は命令に従ってノヴィコフと話し、女帝に書簡を認めた。「ノヴィコフのような基督者が神と陛下が私に信を置かれました群のみにおいてではなく、この全世界のうちに存するよう全能の神に祈ります」。

しかし女帝の心中は穏やかではなかった。ヴァスティーユ占拠の後至る所で、とりわけフリーメイソンのストアにおいて陰謀や「フランスの害毒」が目についた。ノヴィコフは逮捕され懲役十五年を宣告された。彼の手記の多くが廃棄された。しかしエカチェリーナの崩御後(1796)ノヴィコフは釈放された。若き皇帝パーヴェル一世【Павел I】はこの受難者の前に跪き、彼を追放

した前任者の過ちに対し赦しを請うたと言われている。しかし自由のために前線で働く闘志は粉々に砕かれていた。ノヴィコフはもはや力を失ってしまったのだ。モスクワの邸宅で精神的な運動から離れて生活した。

ロシアの文明化に対するノヴィコフの影響は大きかった。これほどの熱意と体系でもって民衆【λαός】の啓蒙を試みたのは彼が初めてであった。新しい世代に文芸, 科学, そして自由への愛を目覚めさせた。ロシア人として初めての書籍出版者兼普及者であり, 良書を選んで印刷し, 私欲の無さにおいても驚くべきものがあつた。読書室や民衆【λαϊκά】のための学校を設立した。彼自身が言っていたように, いつも「汝自身を知れ」という諺を人類にとって最上の義務としていた。

エカチェリーナ期の偉大な作家のより苛烈な証としてアレクサンドル・ニコラエヴィチ・ラジーシチェフ【Александр Николаевич Радищев】(1749-1802)がいる。

ラジーシチェフはサラトフ【Саратов】の近傍の貴族の家柄に属している。女帝は彼を十一人の若者たちと共に, 彼の学問を終わらせてからロシアの政治的奉公に組み込むためにライプツィヒへと送った。ラジーシチェフはゲッレールト【Christian Fürchtegott Gellert】から美学を, プラトナー【Ernst Platner】から哲学を学んだ。しかし彼の魂に対し最も大きな影響力を有していたのは, エルヴェシウス, ルソー, ヴォルテールといったフランス革命の父親たちであった。

ラジーシチェフは祖国に戻り公僕に任じられた。しかし彼の魂は, 自身の手綱を自分で握ることのできない, このような受動的な生活に満足することができなかった。一般市民たちも印刷所を持つことが許可されるや否や, ラジーシチェフは小さな印刷機を購入して自分の家に設置し, 農奴の何人かと共に活字を組んで印刷をし始めたのだった。

1790年, 匿名で処女作『ペテルブルクからモスクワへの旅』【Путешествие из Петербурга в Москву】を印刷した。この本は大きな衝撃を与えることになった。ペテルブルクからモスクワに至る各駅において, 著者は身の毛のよだつ光景を——農奴たちが限界まで忍従し, 土地所有者が彼らを酷使する非人間的なやり方, 民衆【λαός】がその故に辛酸を舐め尽している無学を——目にし詳述している。全てを非常に正確に描写したので, 女帝エカチェリーナ自身がそれを読んで, 本の余白にラジーシチェフが暗に仄めかしている地主たちの本名を書いている。

しかしまさにこの正確さと正直さが女帝の怒りを招いた。ラジーシチェフは本の流通を取りやめ, まだ自宅にまだある写しをできるだけ処分した。しかしそれでも焼け石に水であった。政府は彼をペトロパヴロフスクの獄に繋いで死刑を宣告した。この判決は, 女帝がスウェーデンとの講和による恩赦の「御蔭」で, 「恭しくも」刑を軽くしてくださったので, シベリアの奥地に十年の流刑に処されることとなった。

ラジーシチェフはこの恐ろしい流刑の中でも民俗学と科学に関する研究を続けた。エカチェリーナの死後すぐに恩赦を与えられた。1801年アレクサンドル一世【Александр I】は彼を民法典準備委員会の一員に任命した。ラジーシチェフは余りにも抜本的な改革案を提示したので, 委

員長は強制的に再び彼をシベリアに流刑にすると脅した。絶望したラジーシチェフは、何も事を成し得ぬ様を見て、毒をあおって死んでしまった。

ラジーシチェフの主著は『ペテルブルクからモスクワへの旅』だが、1905年までロシアでの印刷が許可されなかった。ただ外国で翻訳が流通したのみである。扉絵として、ラジーシチェフは『テレマヒダ』【Телемахид】からトレジアコフスキーの詩句を置いた。曰く「冷酷、野蛮で巨大な怪物が、百の口で唸る！」外面的には、旅行でのひとこま、出会い、会話、馬車の窓越しに何を見たのかという観点で、スターン【Laurence Sterne】の『感傷旅行』【A Sentimental Journey】という広く知られた作品の影響を受けている。しかし本質においてこの二冊の本は極めて異なっている。ラジーシチェフはイギリス人作家たちのように、日々の生活の細部を描くことや、彼が見たものでも重要でないものには関心を示さなかった。そうではなく、困難な状況にある彼の国家と、宗教や政治、そして社会といった規模の大きな問題に関心を抱いていた。しかしうまくはいかなかった。彼は救済を見出すために苦闘し戦った。

ラジーシチェフの思想は大胆で視野が広く、教条というよりは彼の宗教上の感性といったものである。彼の神に対する祈りは有名なものではなからうか。「ヤーヴェ、ゼウス、ヴラフマー、アブラハムの神、モーセの神、孔子の神、ゾロアスターの神、ソクラテスの神、マルクス・アウレリウスの神、基督者たちの神、おお、我が神よ！ 汝は遍く一にして同一である！」他にも「汝を否みつつも自然法則を認める無神論者が、汝を讃歌でもって称えている！」

彼は各々の意識の内に表現されるべき自由を求め、絶対君主制に対し極めて激しく攻撃した。彼が見た夢について詳述した。この夢の中で自分が君主になった様を見た。追従者と嘘つきたちが自分を取り囲んで、彼の正義と全能を褒め称えている。しかし突然真実の女神が現れ彼の目を開かせた。そしてその時初めて、どれほどの罪と不正、そして恥ずべきことがこの庇護の下で行われ、全ての人間がどれほど彼を欺き、そして彼が絶対君主であったが故に秩序と正義をもたらすことができなかつたのかを、きをもって目にしたのだった。

同等の大胆さと激しい熱意でもってラジーシチェフは、農民の奴隷化を攻撃した。怒りと苦痛をもって農民の苦悩を、主人が農民をこき使っていること、農民たちが無償で働くことを強制され、こういうわけで夜しか自分の畑を耕す時間がないこと、そして領主がその農民の妻と子供たちを辱め、最後には当局がやってきてこの農民を軍隊に取ってしまう様を描写した。

ラジーシチェフは深みをもった知識人であり、大胆な改革者であった。詩人と作家としての創造力は小さくその言葉は鈍重で不格好であり、物語の方は不確かさと曖昧さに満ちていた。彼の描く主人公たちは同じ話をし、同じような哲学を抱き、同じような情熱でもって奮起した。しかしラジーシチェフの本は今日でもこの作家の誠実さと深みの故に、そして無慈悲な暴君の時代における、自由に対する燃えるような愛の故に人々を魅了し続けている。

ノヴィコフとラジーシチェフよりも幸運であった者として、ドイツに起源を持ち、外務省に官吏として任じられた偉大な喜劇詩人フォンヴィージン【Денис Иванович Фонвизин】(1745-92)が

いた。機知と活気に満ちた彼の最初の喜劇『旅団長』【*Бригадир*】は、裕福な若者たちの過度なフランス鼻と不品行、上辺だけの教養、そして老人たちの凝り固まった頭と未開さという、彼の時代の習慣を風刺したものだだった。

フォンヴィージンがフランスを旅行したとき(1770)、大きな好奇心豊かにパリの社会を批判した書簡を書いた。「フランス人には頭脳というものがない。持っていたとしてもこれはこれでありあまりに不幸だ。というのも、フランス人はただ娯楽しか求めずまさにそうとしか思えないからだ。ダランベールやディドロなんかもパテン師だ。皆金儲けの為に民衆【*λαός*】を騙している。哲学者とパテン師の違いと言われれば、金儲け好きという点を除いては、哲学者の方が想像もできないくらいに虚栄心が強いということだけである。

二作目の喜劇「親がかり(未成年)」【*ο γαιοχτήμονας / Недоросль*】でのフォンヴィージンの風刺は辛辣を極めた。地主たちの未開さと貪欲さの描写は身の毛のよだつものだった。喜劇の主要人物で意地汚いプロスタコフ【*Προσταков*】は自分の農奴を動物よりもひどい環境において搾取していた。自分の息子にいかにして無慈悲でいられるかを教えていたが、読み書きは軽蔑していた。ある日「地理」という言葉を聞いた時に、この学問がどのように役立つのか尋ねた。彼女に「どこかに旅に出かけたと思う時に分かるでしょうよ」と答える人がいた。だがプロスタコフは「でもだとしたら、御者が何の役に立つというんでしょう？ そんなの御者の仕事なんじゃないかしら！ やだやだ！ 貴族がそんな学問を学ぶなんて恥だわ！ 貴族はただ『御者よ、私をここかしこに連れて行きなさい！』こうすればもっと確実に旅ができるでしょうに」と軽蔑を込めて答えた。

風刺は極めて辛辣であり、大きな成功を収めた。エカチェリーナの愛人ポチョムキン【*Григорий Потемкин*】はこの詩人を称賛するとともに脅迫の手紙を書いた。「死ね。さも無くばもう何も書くな！」女帝は専制体制を風刺した喜劇のいくつかの部分が気に入らなかったため、自身が編集していた週刊誌にこう書き送った。「習俗に関するあらゆる墮落は、今日の政府は許容してやっているが、先祖たちは私たちに對し許容することのなかった、発言の自由というものに由来しているのだ」。

フォンヴィージンは脅迫を受け入れ、恐れをなしてそれ以上何も公にしなかった。放蕩生活にのめり込み、酒と女、そして最後には昏倒して宗教的神秘主義に陥った。しかし依然としてフォンヴィージンの名声と影響力は残った。今日に至るまで、フォンヴィージン程かくも正確にそしてかくも生き生きとした民衆の言葉【*λαϊκή γλώσσα*】でロシアの社会を描写したものはいない。

十八世紀の最も偉大なロシア人詩人ガヴリーラ・ロマーノヴィチ・デルジャーヴィン【*Гаврила Романович Державин*】(1743-1816)は彼に先行するどの同業者よりも意識的に、自分の良心を完全に締め上げることなく、女帝の独裁の下で煩わされることなく物を書いて生きることが出来た。

デルジャーヴィンは出自をタタールに有していた。貧しい将校の息子としてカザン【*Казань*】

に生まれた。進んだ教育を受けることはなく、十年間兵士として仕えた。1773年に将校に昇進しプガチョフに対する戦いで勇敢さを発揮した。最終的に退役し(1777)、官吏に任命された。

彼の最初の詩はロモノーソフの影響を受けていた。壮大で響きの良い詩行でもって死の全能を描いた頌歌『メシチェルスキー公の死に際して』【На смерть князя Мещерского】(1779)は大きな成功を収めた。『フェリーツァ』【Фелица】(1782)は更に大きな印象を与えるものであった。フェリーツァとは、女帝エカチェリーナが既に書き著していた寓話『皇子フロル、あるいは棘のないバラ』【Хлор царевич или, Роза без шипов, которая не колется】のチエルケス人【Κερκέζων】の王の娘である。フェリーツァは、「棘のない薔薇」(真理)を探しに出かけた主人公の守護天使である。全能の帝国を讃美するという目的を有するデルジャーヴィンの頌歌を興味深いものにならしめているのは、フェリーツァという天使の形象の下に詩人が用いた強調である。もはや高らかで情熱的な文体ではなく、むしろ滑稽で極めてありふれていて、そして軽い皮肉を含んだものであった。頌歌の中でよく見られる、女帝の空想染みた美德を讃美することはせず、むしろ彼女が徒歩の旅と美味しい食事を愛したこと、フリーメイソンを憎んで言論の自由を認め、宮廷の野蛮な習慣の西欧化と改良に取り組んでいるといった、彼女の真の美德を讃美した。デルジャーヴィンは皮肉を込めて貴族たちの生活を詳述している。「日常生活では尚更だが、私には真昼前にベッドを離れるという習慣はないんだよ——珈琲をすすり——甘い夢を見るんだよ——パイプを燻らせながらね。——ペルシアの王座を粉々に打ち砕くのは私だ——トルコ人共を一掃するぞと脅しつけてやる——それから自分自身がかの偉大なモンゴル人だなんて想像したりしてみてね——私が大地を見つめれば、大地は恐怖で震え出す」。

エカチェリーナは満足の笑みを浮かべ、五百ダカットの金の煙草入れを下賜した。デルジャーヴィンは新しい頌歌を書き、今度はエカチェリーナの二人の偉大な愛人、スマノフ【Σουμανώφ】とポチョムキンを称えた。彼が見出したのだと吹聴していた、皮肉の効いた自分自身の「パルナツソスの新しい道」を追いながら、彼の時代の全ての強烈な個性に対しこの詩人は頌歌と讃美を送った。本人が告白しているように、彼の詩行はこのような彼の時代の「詩的年代記」であった。これらの作品には驚くべき言語的な力と調和をもった詩節が存在する。デルジャーヴィンは民衆【λαού】の言葉と、民衆歌【λαϊκά τραγούδια】とブィリーナ【былина】の有する形象と律動を愛していた。デルジャーヴィンは人生の最後でアナクレオン風頌歌も書いているが、これらは純朴さと喜びという点で残りの頌歌を上回っている。

デルジャーヴィンは政府で高い地位をもって報いられ、エカチェリーナの秘書、そして元老院議員になり、最終的に(1802)アレクサンドル一世の下で法務大臣にもなった。しかし年を取るにつれてより保守的になった——大臣としても、文学者としても。若い作家に制限を設けるために結社を設立し、若い詩人たちを駆逐して専制体制を擁護し、農奴解放に対し論陣を張った。しかしながら、常にその良心の声を押さえつけることが出来たわけではなかった。ある日、ツァールスコエ・セロー【Царское Село】の帝立学習院で、自分で作った詩行を朗読する学生に声を聞いた。老詩人は感動して身を乗り出しこの若者を抱擁し言った。「もはや月日は私を置き去りに

したのだ!」。この小さき学生がプーシキンであった。

デルジャーヴィンは自分の詩的価値に関して遠大な理想を有していた。スラヴ人【η σλαβική φυλή】が生き続ける限り自身の名望が生きながらえるだろうと預言した。「私は滑稽味と情熱をもって——お前とお前の徳目を——大胆に語ったからだ。嗚呼、フェリーツァ。女王よ！この地の最強の指導者に私は微笑みながら真実を述べたのだ——そして純朴な心で我が神の偉大さを讃美した」

しかし後にプーシキンが友人に書いたところでは、彼は最大限の苛烈さをもってデルジャーヴィンを批判した。「彼はロシア語の文法もその精神をまた知らなかったのだ。文体と調和、そして詩行創作の規則のわずかばかりの理想さえ持たなかったのだ」しかし他の所でこの厳格な批判者は、極めて寛大な言葉に自分の意見を濃縮した。「デルジャーヴィンは、およそ四分の三が鉛、およそ四分の一が黄金である」

デルジャーヴィンは叙事詩を書こうと企てたが無駄であった。彼は息の長い作品を書くには適していなかったのだ。この榮譽を実現したのがミハイル・マトヴェーヴィッチ・ヘラースコフ【Михаил Матвеевич Херасков】(1733-1807)であった。『イリアス』と『アエネイス』,そしてタッソ【Torquato Tasso】の『解放されたエルサレム』【La Gerusalemme liberata】の模倣によって、ヘラースコフは詩的雄大さをもって雷帝イヴァンによるカザンの占拠を描く『ロシアード』【Россиада】を歌い上げた。

ヘラースコフは博学で、科学者としても実力も有している。ワラキアの出身であった。はじめ軍に務めていたが、後にモスクワ大学の教授に、そして帝国劇場の支配人になった。二冊の雑誌を出し、自由主義的なフリーメイソンの思想を広めるためノヴィコフと共に活発に活動した。神秘主義者ヘラースコフは、数世紀に渡る善と悪の戦いを描くのを好んだ。多くの教条を含んではいるが詩作についてはからっきしだった彼の小説においては、フェヌロン【François Fénelon】とマルモンテル【Jean François Marmontel】を模倣していた。

十八世紀が終わった。パーヴェル一世(1796-1801)の時代は暗黒の暴政が支配していた。もはや敢えて誰も自分の意見を表現しようとはしなかった。これまで敢えて語り続けてきた各々の自由な意志は抑え込まれてしまっていた。詩は沈黙するか追従に走り墮落してしまっていた。ただ大臣たちだけが、皇帝を持ち上げるために詩や散文を書いていた。

こうして十八世紀は終わったのだ。貴族の一团だけが、つまり教養のあった極めてわずかな者だけが覚醒し、極めて皮相的に西方文明を模倣しようと努力していた。

十八世紀の自由主義的なフランスの諸思想の伝播は単なる外面的なものに留まっていた。フランスの文学【φιλολογία】と哲学に熱狂していた貴族たちと百科全書派の生徒であった女帝は実際独善的であり、農奴制の熱心な信奉者、そして民衆の現実的な教養と啓蒙を目的とするあらゆる努力に対する難敵であり続けた。

しかしロシア社会では大きな発酵が始まっていた。混沌が大きくなり、しかし同時に新しい創造の希望も大きくなっていった。社会の最上流階級に属する若者たちは取り残され、教養を憎み、支離滅裂であった。老人たちは未開であり、教養が無く、残酷で父祖伝来の事物に狂信的に根を張っていた。民衆【λαός】は濃い暗黒、アジア的な運命論の中に沈み込んでいた。知識人たちと民衆の接触は無く、彼らの間には大きな、懸け橋の無い断絶があった。文学【φιλολογία】は依然まだその産着にくるまれており、素晴らしい作品を何も生み出さずあらゆる努力は未だ洗練されていなかった。フランス文学【γαλλικής φιλολογίας】のお粗末な猿真似であり、言葉もまだぎこちないものであった。

しかしながら、精神的な必要性が拡充し、文学【η φιλολογία】はもはや少数の貴族たちや孤立した個々人の玩具ではなくなっていった。エカチェリーナの治世の終盤には多くの詩人や劇作家たちが現れた。帝国による印刷の独占が撤廃され、書物が印刷され広範な範囲に普及した。悲劇はまだ偽古典的なフランスの範の奴隷であったが喜劇は解放を遂げた。そしてデルジャーヴィンと共に頌歌とその主題が真にロシア的な生となった。文学【φιλολογία】はもはやロシアの地に深く根を下ろし、初となる葉をつけ始めていた。

## 第5章

### ロシア文学【λογοτεχνία】の絶頂

#### ロシア・ロマン主義

若き皇帝アレクサンドル一世 (1801-1825) の人格に大きな希望が寄せられた。アレクサンドルは西方文明をロシアにもたらしたということだけではなく、憲法の権利を民衆に初めてもたらすのだという点でヨーロッパを越えようという野心を抱いていた。

感傷的で夢想家。そして神秘主義者で、ロシアと全ヨーロッパをまずは大ナポレオンから、次いで政治的な隷属から自由にするという遠大な使命への信仰に支配されていた。彼には偉大な人文主義的計画と極めて高貴な夢があった。このため、彼が玉座に上った時、至る所から純朴な自由主義たちの声上がり、思想の自由、印刷の自由、憲法、裁判所の再組織、農奴たちの解放、減税、政府の脱中央化を求めだした。

同時に、文学【φιλολογία】においても新しい潮流が生じた。フランスの擬古典主義が没落し、ドイツとイギリスからロシアにロマン主義が猛烈な勢いをもってなだれ込んできた。ヘルダー、クロプシュトック、レッシング、シェイクスピア、リチャードソン【Samuel Richardson】、スターン、ヤング【Edward Young】、オシアン【Ossian】が貪欲に翻訳され読まれた。冷淡で月並みな表現に墮していた「人類、美、真理」といった抽象的で古典的な言葉が、今や新しい生を取り戻し、情熱に満ちた熱い人間の体験となった。心が第一人称で語るのを妨げていた美的規則が撤廃され、詩人はもはや死んでいた神話的寓話という死に装束を纏わせることなく、自分の個人的な感情と喜びと悲しみを直接告白した。主人公たちはありふれた典型や魂を欠いた象徴ではなくなった。そうではなく、骨肉をもった人間であり、叫びを上げる著者自身であった。

このような文学上の【φιλολογικής】<sup>ルネサンス</sup> 文芸復興の主要人物の一人に、タタールにその起源を持ちノヴィコフ自由主義サークルの一員であったニコライ・ミハイロヴィチ・カラムジン【Николай Михайлович Карамзин】(1766-1826) がいた。彼の初めての文学上の【φιλολογικά】エッセーはレッシングの『エミリア・ガロッティ』とシェイクスピアの『ユリウス・カエサル』の翻訳であった。ヨーロッパへの大旅行を試み (1766-1826)、これを有名な『ロシア人旅行者の手紙』【Πисьμα русского путешественника】という書簡の中で詳述した。

これらの手紙は、幾ばくかのロシア人の思考と趣味がどれほど成熟したかを明らかにしてくれるという点で重要である。ピョートル大帝の時代の人々がそうだったのだが、重要なものも重要でないものも含め、西方の旅行で出会ったあらゆるものに対し子供のように驚くことはもはやなかった。そしてもうヨーロッパのものを悪魔的で呪われたようなものとはみなさなかった。優れた判断力と正確さで若い日のカラムジンは悪いものから良いものを見極め、何が適応可能なもの

か、何が祖国への移植に適し、何が異色で適応不可能なものなのかを選び分けた。注意力と貪欲さをもって旅行し、傑出した精神を見ようと熱心に努めた——ドイツではカント、プラトナー、ヘルダー【Johann Gottfried von Herder】、ヴィーラント【Christoph Martin Wieland】を、スイスではラヴァーター【Johann Caspar Lavater】、そしてパリではあらゆる傑出した哲学者と作家たち。カラムジンはフランス革命に大きな関心を抱くことがなかったが、フランス国民【έθνος】というのはこの恐ろしい悲劇に全く参与しなかったのだと断言した。百人ほどの人々が重要な役割を果たすや否や、他の全ての人々は単なる観客として後を追ったにすぎないのだから。

『哀れなリーザ』【Бедная Лиза】や『貴族の娘ナターリヤ』【Нагалья, боярская дочь】のようなカラムジンの物語はさらに大きな印象を与えた。ピョートル大帝の時代から既に外国の小説が翻訳され、この外国の手本の上に多くのロシアの模倣が生まれ始めていた。エカチェリーナの時代だけでも五百四十の小説が翻訳され、そのうち三百五十三がフランス語、百七がドイツ語からであった。

道は拓けていた。だが、物語のために文学的に【φιλολογική】純粋な言葉を用い、著者としてかくも自分の感性を自由に解き放ったのはカラムジンが初めてであった。『哀れなリーザ』が与えた印象は驚くべきものであった。リーザは貧しかったが徳を備えた花売りであった。ある暴虐な領主が彼女を愛し、彼女を喜ばせようと財と社会的身分を投げ出し、素朴な自然の生活の中で彼女と生きようとした。この作品全体が自然と恋の冒険の息吹に満ちている。数千人がリーザの不運と死に泣いた。モスクワ近郊にある池で浪漫のヒロインは溺れてしまったのだが、そこは感受性に満ちた全ての若者たちの巡礼地となった。

しかしカラムジンはその価値の大部分を自身の言語に負っていた。当時まで「話すように書け」という至上命令はただ喜劇においてのみ適応可能だと信じられていた。ロモノーソフが整理した高い文体、或いは混合した文体では異なった言葉が書かれなければならなかった。カラムジンはロモノーソフの重厚な動きの「高い」表現、擬古典調で理解の困難な教会の言語を越えて、新しい言葉と表現を導入し、文体に生を与えた。もちろん彼の言葉はまだ人工物のようにも見えたが、素朴で手が加えやすく、真実の道を拓いてくれた。多くの人が彼の言語的革新に対し狂ったように攻撃した。しかし全ての若者たちは大胆な模範の味方をした。

カラムジンはロシア史を研究し、ノヴゴロドのモスクワ人に対する叙事詩的戦いという主題を持った『女代官マルファ』【Марфа-посадница, или покорение Новгорода】という物語を刊行した。ここでもカラムジンの浪漫主義的な主情主義は、ロシア史の中にどれほど多くの英雄たちが存在したのかを示そうという彼の意欲と一致していた。

疲れも知らずに働いて、1818年に『ロシア国家史』【История государства российского】の初めの八巻を出版した。残りの三巻の出版は三年後になった。

この歴史は抑えきれない祖国主義的な情熱を掻き立てた。プーシキンが告白しているように、教養ある者の大部分が、コロンブスがアメリカを発見した時のようにロシアを発見したのだった。しかし彼の膨大な量の作品の歴史のかつ科学的な価値は取るに足らないものである。カラ

ムジンの歴史は派手で息の長い小説に似ている。抒情的な描写と劇的な語り、主情主義に大言壮語。主にロシア史の重大な出来事を描き、またロシア人と外国人を魅了することが出来る範囲で、ロシア民衆【λαός】の特徴、生活、そして昔の英雄たちや偉大な男たちの心理を描いた。燃え盛る祖国主義と著者の気取った叙事詩的な態度に奉仕するため、多くのものを誇張し改変していった。

彼の作品の価値は歴史的なものではなく文学的【φιλολογική】なものである。その言葉は豊穡で、文体は生き生きとしており、情熱に満ちている。ロシアの文人たちへのカラムジンの歴史の影響は大きかった。これはロシア人の小説家と劇作家たちに豊かで、極めて明白なロシア的な主題を与えた。プーシキン自身もカラムジンの歴史に彼の悲劇『ボリス・ゴドゥノフ』【Борис Годунов】を負っているぐらいだ。

しかし、裕福な地主とトルコ系奴隷の母の間の息子であるヴァシーリー・アンドレーヴィチ・ジュコーフスキー【Василий Андреевич Жуковский】(1783-1852)は、ロマン主義のロシアへの主要な導入者で「ロシア・ロマン主義の父」である。ジュコーフスキーはドイツへの数度に渡る旅行を企て、その旅行によってフンボルト、ゲーテ、ティーク【Ludwig Tieck】と面識を得た。後にニコライ一世【Николай I】の皇后になったアレクサンドラ・フョードロヴナ【Александра Федоровна】の侍講として、ジュコーフスキーは宮廷のお気に入りとなり、この影響力を彼の友人たちや文章に便宜を図るよう常に行使した。デカプリストたちの仲介役を務め、プーシキンの庇護者となり、ウクライナの国民的【εθνικό】詩人シェフチェンコ【Тарас Шевченко】を農奴状態から解放するのに必要なお金を工面した。ジュコーフスキーの性格は穏やかで柔和であった。彼のロマン主義は自然に対する無制限な精神的欲求と感受性豊かな愛であり、どこか不確かな死後の世界への望郷の念であった。曰く、この地は控えの間に過ぎず、むしろ苦痛を伴う準備なのだ。忍従と謙遜さをもって自由をもたらしてくれる死を待ち望もう。この地での生から後の生に希望を移し、この「虚無」たる世界を教会と皇帝の暴政が自由に統治するがままになさしめた。

このように彼が再び、ロシア文学【λογοτεχνία】に新しい理想を、古典主義と同じぐらい模造品ではあるが、ロマン主義的理想を与えた。全てのロマン主義者と同じようにジュコーフスキーは中世と騎士道冒険譚、理想主義的で貧血じみた恋愛を、そしてトゥルバドゥールと姫君を愛していた——ロシアの歴史と生に何の関係もない主題ではあったが。ロマン主義を伴ったロシア文学【λογοτεχνία】が自由を手にする事はなかった。ただ隷従の形を変化させただけだった。

ジュコーフスキーによると、生の真の本質と最上の価値は詩作であった。彼はロシアで【詩的】技術をかくも高い頂点にまで登らせた最初の人物である。彼にとって詩はもはやデルジャーヴィンが言ったような「精神の玩具」でもなければ、多くの教養のあるロシア人たちがこの当時まで考えていたような単なる人生の装飾でも娯楽でもなく、人生の真なる最上の目的であった。「詩は天上の宗教の、この地での姉妹なのだ」。彼にとって詩人は絶対に【詩的】技術をより下位の目的に貶めてはならなかった。彼の内的必然がそう強いる時だけ讃頌せざるをえないようなもの

なのであった。

ジュコーフスキーはボロジノの戦い【Бородинское сражение】に参加し、当時彼の初となる長大な詩『ロシア軍野営の詩人』【Певец во стане русских воинов】を発表した。直ちに名声を獲得した。戦友たちがパリに入った時、彼は自由主義的な皇帝に頌歌を書いた。彼の詩は宮廷で読まれて受けいれられ、皇妃は泣き始めた。若き偉大な詩人が誕生したという話がロシア中に広まった。

しかしジュコーフスキーの主要な業績は彼の翻訳にある。あらゆる文学【φιλολογίες】から選択し、彼の穏やかでロマン主義的な性質によりよく親和する詩を翻訳した。マハーバーラタ、ウェルギリウス、ホメロスのオデュッセイア、ゲーテの多くの作品、シラー、ウーラント【Ludwig Uhland】、ヘーベル【Johann Peter Hebel】、バイロン等から長大な抄訳を翻訳した。

ジュコーフスキーは翻訳した全ての作品において、彼の個人的な深い刻印を刻みこんだ。バイロンはそこまで悪魔的ではなく、シラーはそこまで大胆に自由を述べ伝えず、ホメロスも感傷主義者になってしまった。故に、ジュコーフスキーが自分の翻訳した詩集に序文を書いて「この小品においては全てが私の作品である。けれども私が書いたものは一つもない」としたのは正しかった。

これらジュコーフスキーの翻訳作品には大きな価値がある。彼の言語は豊かで柔和であり、正確に外国の模範を与えようと努力した彼の詩行はしなやかで穏やかであり、空前の優雅さを獲得していた。そしてより一般的に言ってロシア文学【λογοτεχνία】におけるジュコーフスキーの影響力は重大である。偉大な模範を同胞たちに明らかにし、フランス人以外にもロシアの魂に極めて深く調和する偉大なドイツ人やイギリス人の文学者も存在していることを示した。ジュコーフスキーは新しい道を拓き、ロシア文学【λογοτεχνία】に新しい文体の模範をもたらした。

ジュコーフスキーはホメロスの『オデュッセイア』を翻訳し、また他の詩人でもニコライ・イヴァノヴィチ・グネーヂチ【Николай Иванович Гнедич】(1784-1883)が『イリアス』を翻訳した。ある古代の詩行が、その力強さを失うことなしにはアレクサンドランの十二格に押し込まれることありえないということを目にした。自分自身の韻律を生み出しはしなかったが、ロシア語が許す限りホメロスに忠実であろうとした。そこで長短短の六歩格【δαχτυλικό εξάμετρο】を選択し、教会の言葉から多くの表現を取って言葉通りに、韻と韻が一致するように『イリアス』を翻訳し、偉大さと力に満ちた不朽の驚くべき作品を創造した。プーシキンは「身震いしながら、この翻訳の中にかの偉大な老人の影を感じていた」と言った。

グネーヂチはいくらかの現代ギリシアの民衆歌【νεοελληνικά δημοτικά τραγούδια】とテオクリトスの『シラクサの女たち』を世に出し同じぐらいの成功をおさめた。

彼の先駆的な作品の中で最も輝かしいものは『漁夫』【Рыбаки】であり、そこで見事に自然を、そして何よりも真夜中の北方の太陽を描写した。「夜空は月も星もなく輝き、西の紫の土が東の黄金と混ざり合う——あたかも夕べの紫がその手で朝に薔薇を渡しているかのよう」。

グネージチは彼の翻訳と先駆的な諸作品において幾ばくか浪漫主義的な色彩をもって古代ギリシアと自然について著した。しかしより浪漫主義的な人物にコンスタンティン・ニコラエヴィチ・バーチュシュコフ【Константин Николаевич Батюшков】(1787-1855)が挙げられる。彼は、グネージチのようにギリシアではなく、ラテン古代時代の崇拝者であった。彼の模範はカトゥルス【Gaius Valerius Catullus】であり、ティブッルス【Albius Tibullus】であり、ホラティウスであった。

バーチュシュコフは士官として軍隊に認められナポレオンに対する戦いで奮迅した。病気を患ったり恋に落ちたりしてイタリアに肉体と魂の癒しを求めて逃げ出したが徒労に終わった。1822年から死に至るまで正気【λογικό】を失ってしまい、三十三年間、バーチュシュコフは狂人として辛い人生を過ごした。

バーチュシュコフはロシアの最も偉大な抒情詩人【ανακρεόντειος ποιητής】であった。彼の詩行は喜びと細やかさに満ちている。時間と共に彼の不運な人生が彼をエレギア格へと導き、彼の詩は憂鬱と絶望に陥った。「人は奴隷に生まれ、奴隷のまま墓に至る」のだ。グネージチの生き生きとした浪漫主義的な色彩もジュコーフスキーの柔和な平穩を持つこともなかったが、よりよい死後の生が存在するのだという信念を持ち続けた。

コサックたちの士官であるデニス・ヴァシリエヴィチ・ダヴィドフ【Денис Васильевич Давыдов】(1784-1839)の生涯は極めて独特で、喜びと戦いへの冒険に満たされていた。ダヴィドフにとって詩とは玩具であり、戦闘の無い時や、酒に酔っていないときに忠実な同僚であるコサックたちと過ごしているわずかな時間の気晴らしであった。「詩は、シャンパンのボトルと同じ喜びを私にもたらしてくれる」と言っていた。ある詩の中で「私は詩人などでなくコサックに過ぎない——ヘリコン山を狩で訪れたのだ——私の自由の天幕に——カスターリアの泉の近くに深くも考えずに釘を打ちこんだのだ。——騎士がそぞろに馬の鞍に腰かけるのはふさわしくない——平和、喜び、そして美を歌うのは。——しかし故郷に戦の雷が鳴り響く時——私が先陣を切って歌の舞踏で我が声を張り上げよう！」

ダヴィドフの詩行はほとんど即興且つ性急で、文学的な【φιλολογικά】装飾や細やかな洗練さはない。しかしその全ては生き生きとしており、意志の赴くままコサックの冒険的で戦いの人生と魂に満たされていた。寒さで真っ青な鼻をしながら火の周りに座り、感覚が無くなって地面にへたり込むまで飲むユサルたちを素晴らしく描写した。

「シェイクスピア熱」という新しい息吹が抒情詩だけでなく演劇にも命を与えた。時間と場所と行動の統一という古い演劇の規則が廃止された。ギリシア・ラテン古典世界がもはや主題を提示することはなく、騎士道の中世とロシアの歴史がこれに代わった。

このような新しい試みの重要な代表者にヴラディ斯拉フ・アレクサンドロヴィチ・オーゼロフ【Владислав Александрович Озеров】(1770-1816)がいる。彼の一作目の歌である『アテネのオイディ

プス』【«Эдип в Афинах»】は未だ内容的に古典の要素を有していた。しかし二作目となる『フィンガル』【Фингал】という歌からは古い模範からは解放され、その内容が明白に浪漫主義的であるばかりでなく、古代の歌が要求したような五幕構成でもなかった。たったの三幕で構成されていたのだ。三作目の歌である『ドミトリー・ドンスコイ』【Димитрий Донской】(1807)は祖国に対する大きな熱狂を引き起こした。

この時代多くの浪漫主義的な歌と喜劇が書かれたが、ほとんど全てどうでもよいようなものである。最も豊穡な喜劇作家として、詩人ジュコーフスキーを風刺した『新スターン』【Новый Стерн】と『リペツクの温泉』【Урок кокеткам, или Липецкие воды】という喜劇を書いたアレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・シャホフスコイ【Александр Александрович Шаховской】(1777-1846)が挙げられる。後にシャホフスコイは純粋な浪漫主義から身を引きウオルター・スコットの『アイヴァンホー』、プーシキンの『ルスラーンとリュドミーラ』【Руслан и Людмила】、そしてシェイクスピアの『あらし』を劇にした。

しかしこれら全ての努力は不器用で皮相的であった。新しい技術は新しい社会からしか生じ得なかったが、むしろ後の骨が折れ優美さを欠いた、先駆的な準備から生まれるようになった。これらの中でロシアにおける生き生きとした社会的発酵が既に始まっていたのだ。大ナポレオンに対する解放戦争が狂心的な祖国への情熱を引き起こしていた。ロシア人たちは誇りを持って自分たちの力量と偉大な歴史的使命を意識した。

時を同じくして、ヨーロッパで数年間戦って誇らしくパリに入ったロシアの若者たち(1814)は、ヨーロッパ人たちがどれほどロシア人たちの先を行っているのかを目にした——何よりも民衆の自由と行政と国家の組織において。頭に血の上りやすい多くのロシア人イデオログたちは祖国に帰るや否や、ロシア民衆【λαός】の皇帝専制からの解放を可能な限り成し遂げるように誓った。

戦士たちが勝利を飾った戦闘から帰還した時、もはや遅れてしまっていた悲惨な律動をしたロシアの生に適應することが出来なくなっていた。年老いた両親たちの理想が憎らしく耐え難いものとなっていたのだ。自分たちロシア人はヨーロッパの解放者であるのに、自国の民衆【λαός】さえ自由にすることができないことに憤慨していた。

しかしウィーン会議と神聖同盟締結の後、ロシア人イデオログたちの失望は極めて痛ましいものになった。自由主義的で夢見がちなアレクサンドル一世に絶大な希望を置いていた。パリのスタール夫人のサロンで、速やかに農奴を解放しロシアの大地で働く全ての者に耕作地を与えると宣言したではないか？そして玉座に上ってすぐの初となる業績も、秘密主義的な宰相職の廃止と拷問の禁止、新しい学校の設立と政府の刷新、そして司法の細分化した部門を整理する努力ではなかったか？出版に自由を与え、思いやりをもってアダム・スミスの新しい経済理論に耳を傾けたのはこの皇帝だったではないか？

そして今や巨大な勝利の後で、突然人々は彼を専制政治の擁護者だとみなすようになった。若者たちは怒りに燃えて秘密結社を結成した。表面的には自由主義と啓蒙をその目的としているが、裏では民衆【λαός】を覚醒させて革命の準備をし、皇帝の家族を殺害して共和制を宣言するために働いていた。

初となる大きな秘密結社(1818)<sup>4</sup>「幸福同盟」【Союз благоденствия】は解体したが(1821)、すぐに新しい「北方結社」【Северное общество】と「南方結社」【Южное общество】が革命のみを目的として設立された。タガンログ【Таганрог】での皇帝の不慮の死(1825)は彼らに益するところとなり、1825年12月14日にペテルブルクで公に革命の旗を掲げた。この初めの偉大な革命の試みの初期協働者たちは、ロシア史の中でデカブリストの証人的な名によって知られている。しかし運動は不完全に組織され、即座に血の海で溺れることとなった。百二十一人の共謀者が迫害を受け、その内五人が即刻殺害され、残りはシベリアに追放されて彼らが軍隊で有していた階級は全て剥奪された。指導者の内の一人であった詩人のレイレーエフ【Кондратий Рылеев】は絞首台に上る前に民衆に向かって雷のような声で叫んだ。「我々はロシアの自由と益のために戦ったが故に死んでいくのだ。ロシア民衆【λαοὺ】の解放のため、我々が生を変える時が来ることを祈ろう」

#### クルィロフとグリボエードフ

だが、このような知識人たちの新しい熱烈な盛り上がりに対し、クルィロフとグリボエードフという二人のロシア「インテリゲンツィア」の例外的な代表は活動的に参与することはなかった。この二人は革命の興奮に対し不信と冷淡さをもって向かい合い、古い体制に信を置き続けて若者たちの皮相さとその破滅的な結末を告発した。二人とも芸術においても古い模範に従った。しかし二人とも、かくも大きな力と正確さを持って新しいロシアの生から題材を汲み上げたので、今日でも彼らの作品はあらゆる生命力を保持している。

クルィロフ【Иван Андреевич Крылов】(1768-1844)は貧しい士官の息子であり、モスクワに生まれた。十歳からパンを得るために働かねばならず、学校に行く時間もなかった。彼の母親は葬送歌奏者として金持ちの家で歌っていた。

しかし学習に対するクルィロフの欲求は大きかったので、彼に残されていたわずかな時間を直ちに研究につぎ込んだ。文学的な栄誉という野心を抱いていた。十六歳から早くも物を書き始めた。彼の処女作は喜劇『コーヒー占い女』【Кофейница】であり、ある出版社に六十ルーブルで売った。古典的な歌も書き、風刺的なパンフレットも出版し、それらの精神とロシア社会の正確な描写の故に大きな成功をおさめた彼の喜劇も上演された。

1805年になるとすぐにクルィロフは初の寓話【μύθους / басни】を書いて自分が真に歩むべき

4 カザンザキスは「幸福同盟」の設立を1815年と誤記しているが正しくは1818年。

道を見出し始めた。当初彼の偉大な模範はラ・フォンテーヌであったが、クリイロフは直ちに彼の影響を抜け出して自分自身の刻印を持ってロシアの寓話【μύθους / басни】を創造し始めた。彼の初となる選集は大熱狂を持って受け入れられた。

クリイロフの寓話【μύθους】はロシア文学【φιλολογία】の不滅の作品に属するものである。道徳家及び哲学者としてクリイロフはこの世に何も新しいものをもたらしはしなかった。彼の世界観は散文的だが、実践的かつ冷静であった。分別をわきまえたブルジョワの世界観である。質素であれ、集めよ、計算せよ、実行できないことを約束するな、新しいことは信用するな。抽象的な思考や哲学的で「頭痛の種」となる思考、直接的で実践的な目的を持たない科学的な思考を軽蔑した。彼の寓話【μύθο】の一つ『見物人』【Зритель】で「動物博物館」に行く人々揶揄し、人々がそこで目にしたあらゆる奇跡——虫と蝶——は見たのに象は見なかったということをお話した。

クリイロフの寓話【μύθο】の価値は彼の哲学的で先駆的な思考にあるのではなく、その思考の驚くべきほど単純な形式に存する。クリイロフは根気強く警句のような単純さを見出そうと努力した。新旧の寓話作家たちとロシア民衆【λαός】から主題を得たが、彼がその主題に与えた形態の完全さによってそれを完全に自分自身のものとした。

彼の寓話【μύθο】の中で最も有名なものに『鷺鳥』【Гуси】がある。ある農民が鷺鳥の市場に行った。道すがら鷺鳥が通行人を見ると、自分たちがローマのカピトリヌムを救った英雄的な鷺鳥の家系に直接由来するにもかかわらず、農民があまりにも粗雑なやり方で自分を扱っていると言って彼に不平を鳴らしていた。通行人は鷺鳥たちに自分たち自身は何を行ったのかと尋ねた。しかし彼らと与える答えは常に同じである。「我らの先祖がローマを救ったのだ！」通行人は最後には怒り出した。「お前たちの先祖たちは静かにさせておいてやれ——彼らは自分の業で栄誉を刈り取ったのだ。——しかしお前たちは、おい、ただ揚げ物にされる価値しかないぞ」。

詩人は悪辣にも更に二つの詩行を追加した。「ここに多くのことを付け加えられよう——だが、我々は恐怖の故に鷺鳥を怒らせることができないのだ……」。

クリイロフの言語は民衆【λαϊκή】のもので、生き生きとしていて表現力が強く、十九世紀初めのロシア社会を描写する能力において比類のないものである。彼の物語【των μύθων】の動物は——鷺鳥、象、鼠、狐、子羊、猿、等々——ロシアのあらゆる街や村を往来している、爆笑を誘うような人間の典型である。私たちはいつも、動物の透明な性格によってロシア人領主と農民【μουζικό】を区別することになる。

狼たちが乱暴を働くと行って羊たちは象に不平を言った。公正でえこひいきのない象は、その不平が本当かどうか確かめる会合を行った。賢く公正な象は判決を下した。「私は自分の王国で不正には耐えられない！——君たちは各々の羊から羊毛だけを取れ——それ以上を求める者に災いあれ！」

クリイロフはしばしば、自分たちが猿真似している文明の活用法を未だに知らない同時代人たちを大胆にあざ笑っていた。年を取ってもう目が見えなくなった猿がいた。眼鏡をかければ目が

開くだろう、と彼に言う者があった。そこで眼鏡を一ダース買って耳と頭、そして尻尾にかけた。目を突き出してみたが、全くよく見えるようにはならなかった。「このくそつたれの眼鏡め。こいつを持って来た奴もだ！」と叫びを上げ、怒ってむしり取って石で粉々にした。

他の寓話【μύθοι】に狐が判事のものがある。牛舎から雌鶏が盗まれたのだが、牛舎にいた子羊が盗人じゃないのか、と訴えたがった。判事は自身の裁定を述べた。平和な夜に羊が雌鶏と一緒にいて、雌鶏が美味しそうだったと仮定するならば、疑いようもなく羊は誘惑に打ち勝つことができず雌鶏を食べてしまうことになると言わざるを得ない。故に、羊は死刑を宣告された。そうして、羊の肉を判事が、そして羊毛を原告が取ってしまったのだ！

次の寓話【μύθος】の『猫とナイチンゲール』【Кошка и Соловей】は、暴政の爪によってあまりに若くして死んでしまい歌うことの叶わなかった多くのロシア人詩人の悲劇的な運命を、極めて素朴で力強い形で克明に描いたが故に恐ろしい印象を引き起こした。猫がナイチンゲールを爪に掴んだまま甘い声で話しかける。「お前ほど甘い声で歌う者はないと聞いたぞ。俺だってお前を食べたくはないんだ。お前が歌って俺が満足すれば自由にしてやるさ。というの、いいか、俺だって音楽に夢中なんだ」。しかし猫の爪に捉われた不運なナイチンゲールは歌うことができなかった。声は途切れ、わずかな引き裂かれた叫びが漏れ出るだけだった。猫はがっかりしながら「なんだ、これが有名なお前の歌とやらなのか。だがこれならうちの子猫たちの方が歌が上手いじゃないか。じゃあ今度はお前の肉を試してやろう。こっちの方はもっと美味しいことだろう！」そしてナイチンゲールを食べてしまった。詩人は付け加える。「私たちの間で完全に諸君を信頼してもいいものだろうか？——誰が下手くそな歌を猫の爪の中で歌うことになるだろうか！」

これら全ての寓話【μύθοι】は、能天気で放蕩者のクリイロフの下に、人類がよりよくなっていくはずだとは信じることなく、物事を明晰に見てあらゆる暴政の圧迫に忍耐している不治の厭世主義があるのだということを証明している。寓話と素朴さ、そして微笑をもって自分の悲嘆を表現し自分自身のやり方で体制を咎めているのだ。しかし人間本性に何らの勇敢さを期待していなかったので革命の理念には全く参与しなかった。これを無力でうすのろな、改良の余地など全くないものとみなしていた。

アレクサンドル・セルゲーヴィッチ・グリボエードフ【Александр Сергеевич Грибоедов】(1795-1829)はモスクワに生まれ、彼が情け容赦なく風刺した、所謂「上流社会【καλή κοινωνία】」に属していた。外務省の大臣としてすぐに頭角を現し、当時困難な状況にあったペルシア宮廷のロシア大使館の事務官の地位に任じられた(1819)。

後に任地となるトビリシで、グリボエードフは高名な喜劇『知恵の悲しみ』【Горе от ума】を書いた。彼は友人たちにこれを読んでやり、大きな印象を与えた。検閲によって印刷と流通が禁じられた。当時は手書きのものが広範に出回っていた。

しかしグリボエードフは革命サークルとも関係を持ち、トビリシに戻ると逮捕されて牢に繋が

れた。だが取り調べでは何ら有罪とみなせるような物は見つからず、グリボエードフは再びトビリシでの地位に就いた。後にロシア・ペルシア間の平和条約のためにロシア代表として送られた。彼の外交官としての成功が余りにも大きかったので、皇帝はまだまだ若かった彼をテヘランのロシア大使に任命した。ペルシア人たちは極めて大きな礼節をもって彼を迎えたが、少し経つと群衆が大使館に押し寄せて大使たちを殺し、次の日に血と死体の中にグリボエードフを見つけることとなった。

グリボエードフのあらゆる文学的な【φιλολογική】名声は彼の『知恵の悲しみ』の中に保持されている。他にも書くには書いたが書き物としての価値はない。彼が晩年に書いた悲劇『ジョージアの夜』【Грузинская ночь】の断片がいくらか残っているだけだが、シェイクスピア的息遣いという点では驚くべきものである。

彼の有名な喜劇は1833年に初めて印刷され、検閲によってずたずたに破られた。この喜劇の主人公チャーツキー【Александр Андреевич Чацкий】は三年間ヨーロッパへ行って不在にした後モスクワに帰って来た。彼の頭は大胆な理想と洗練されていない計画でいっぱいであった。しかし恐ろしい失望がすぐに彼を待ち受けていた。モスクワでは全てが放って置かれたままになっていたのだ。非文明的で遅れていて、噴飯物であった。ただ彼が愛していた女性のソフィアだけが変わってしまい、無関心さと冷酷さをもってチャーツキーの下にやって来た。主人公は激高し、全ての馬鞍を壊して面と向かって皆に自分の考えていることを示して全員の敵になってしまい、皆が彼を狂った人間だとみなした。チャーツキーはその時になって、惨めで虚偽に満ちた場所に返って来たことを後悔した。「どういう邪悪な悪魔が俺をここに、このおしゃべりどもとおべっか使い、そして悪意に満ちた者共の天国に連れて来たんだ。まだ生きている奴らも、どいつもこいつもミイラみたいに乾ききってしまっている。お前たちは皆私を狂人だとみなし、この判断が正しいと思っている。一体どうして誰が、たったの一日でも自分の正気を失わずにお前たちの地獄で生きることができるだろうか。とどのつまり、モスクワは遠くなってしまったということだ。遠くなったのだ！ 傷ついた心の逃げ場、穏やか片隅を見出すまで全世界を旅しよう。馬車よ！ 私の馬車よ！」

もはや民衆【λαός】や下級官吏ではなく上流社会が風刺された喜劇がロシアで初めて書かれたのだ。単にその欠陥や喜劇的な一側面をだけでなく、全体の基盤とあらゆる発露、諂いと嘘、愚かしさと倫理の麻痺が風刺されたのだ。そして何よりもこの喜劇においては容赦のない鋭さで農奴の隷従を激しく非難した。その資格を全く有しないような怠惰な領主が何百万の人々を搾取している。

もちろん主人公は短気な若者であり、その頭脳はまだ成熟しておらず、自分が何を欲しているのか正確にはわかっていない。彼は一つの叫びに過ぎないのだ。過ぎ去った死を受け入れることのできない若さの叫びなのだ。このチャーツキーの叫びには定義を与えられ体系の中に押し込まれた内容といったものはなく、まさにこの点にこそグリボエードフの喜劇の永続する新しさの真骨頂が存するのだ。ロシア社会は変化し、もはや彼が風刺した滑稽さ、つまり領主も農奴も存在

しはしない。しかし、いつの世でも広大で勇敢な若き心の叫びは存在し、私たちは今でもチャーツキーの叫びの中に新しい内容を気兼ねなく置くことができるだろう。

グリボエードフは驚くべき心理学的な力をもって自身の主題を実行した。精緻な性格を与えられているあらゆる登場人物が、組織全体の一部分となっている。詩行はもはや重々しいアレクサンドランではなく、柔軟性を備えた豊かで自由なクリロフの詩行である——その対話には精神と喜びが満ちており、チャーツキーの言葉【λόγος】は壮大さと情熱で満たされていた。喜劇の枠組みは誰もが知っている古典であったが、その内容は真のロシア的生、日々の典型と完全に新しい喜劇的主題の取り扱いという完全に新しいものだった。この喜劇の表現の多くは諺のようになり、チャーツキーは象徴にまで高められたのであった。

## 第6章

### 古典期 —— アレクサンドル・プーシキン

ロシアの文学的【φιλολογική】言語は既に形成され、詩行も古風な硬直性から解放されていた。ロシアの中枢では知識人と文人【φιλοτέχνων】の集団が新啓蒙者の情熱をもって各々の精神的発露を追い求めていた。

骨の折れる探り探りの探求の後、ロシアの文芸技術を外国の軛から決定的に解放し独立した道を備えてくれる、最上の総合的典型がロシア文学【φιλολογία】に到来する時がもはや熟したのであった。

ロシア文学【φιλολογία】におけるこの解放者こそがアレクサンドル・プーシキンである。

ロシア人たちは彼をロシアで最大の詩人であり、ダンテ、シェイクスピア、そしてゲーテにも匹敵する世界で最も偉大な詩人の一人だとみなしている。ロシア語を知らずプーシキンの作品に直接は触れることのできない人々には、ロシア人のこの熱狂は誇張のし過ぎだと思われるだろう。プーシキンのリズムと言語の魅惑的な喜びも、ロシア魂の表象におけるこの上ない力をも感じることができないからなのだ。

プーシキンは、現実主義的な鋭敏さと同時に豊かな想像力のおかげで、彼の後に続く全てのロシア人作家が追従することになる二つの大きな道を拓いた。つまり、現実主義【リアリズム】と理想主義【イデアリズム】である。プーシキンはオリンピア的調和に大きな矛盾を混ぜ込んだ、才能に溢れた天才であった。極めて早い段階で自分の中のタイタンの反抗的な叫びを従わせ、若い時分にかくも愛したバイロンを乗り越え、調和していると同時に激しく揺さぶられている均衡にまで到達することに成功したのであった。

アレクサンドル・セルゲーヴィチ・プーシキン【Александр Сергеевич Пушкин】(1799-1837)は自身の血筋にアフリカの血を有していた。彼の母親は、コンスタンディヌーポリのロシア大使で皇帝ピョートル大帝に贈物を贈ったこともある有名な黒人のアブラム・ガンニバル【Абрам Петрович Ганнибал】の子孫である。彼のアフリカ人としての出自は彼の人格の特性と、激しい火山のような気質に鮮明に現れていた。

プーシキンが受けた養育は、その時代の皮相的なフランス風の教育であった。家ではフランス語だけで話し、八歳のプーシキンが最初の詩行をフランス語で書こうとしたぐらいであった。幸運なことに、プーシキンの精神的成長において重要な役割を果たした人物で、彼自身が告白しているように、あまりにフランスにかぶれてしまう危険から救ってくれた偉大な恩人がいた —— 農民で乳母のアリーナ・ロジオノヴナ【Арина Родионовна】だ。彼女がロシア民衆【του ρωσικού λαού】の素晴らしい童話を物語ってやり、彼を言語と伝説、そしてロシアの魂へと導いてやった初めての人物となった。

プーシキンは十二歳でツァールスコエ・セロー帝立学習院【Императорский Царскосельский лицей】へ通ったが、その時には既に詩の靈に捕らえられていて、詩は書いていたが授業を放ったらかしにしていた。プーシキンの学習院時代からは凡そ百の詩が残っているが、豊かな言葉、詩行の調和、深い感性、風刺的雰囲気、そして何よりも単純な表現と心地よい詩行を据えるためにプーシキンが必要とした悲痛な業が、既に彼の詩作の主要な特徴として現れていた。プーシキンの手稿は全生涯を通して消去の後でいっぱいであった。神々しいまでの単純さは、極めて複雑で血のにじむような努力を経た最後の果実であった。これら初期の詩から同時に、アナクレオンので愉快的詩節や祖国への頌歌、オシアン的な憂鬱や揶揄する様な警句といったプーシキンの多面的で豊かな魂が現れていた。

プーシキンは外務省の官吏に任命された。純朴だった彼は、社交界へと投げ出された——サロン、クラブ、酒、恋の冒険。だが彼の人生の目的は詩作であり、このような皮相的な社交界からも養分を得たのであった。1820年には学習院時代から既に手を付けていた初の大作詩『ルスランとリュドミーラ』【Руслан и Людмила】を発表した。

この詩の中で極めて特徴的なことは、浪漫主義的な情熱に駆られて我を失ったり様々な話を擬古典の無感動さに押し込めたりはしないという、プーシキンの民衆に関する主題の取り扱い方である。プーシキンは感性と優美、そして皮肉を込めて主人公たちを練り上げていく。あなたは、この詩人が自分の生み出した主人公たちを支配し玩ぶ創造主のように感じることだろう。彼の詩は既に極めて良い響きを持ち頭脳明晰なものであった。

プーシキンはこの時期有名な秘密結社「緑のランプ」【Зелёная лампа】の一員であった。この結社の目的が何であったのかは定かではない。酒と恋愛に溺れ遊び呆けた若者たちの集まりであったのか、それとも新しい技芸の形を追求した文学【φιλολογική】サークルだったのであろうか？「緑のランプ」は常にデカブリストの革命主義集団と密な接触を有しており、その成員たちがこの時代の自由主義的な政治的成熟に無関係なはずがなかった。

プーシキンの詩の多くがこの時代の急進思想を表現した。多くの上級官吏と皇帝の行為さえをも大胆に風刺した。プーシキンは逮捕の危機にさらされていた。しかしジュコーフスキーとカラムジンの仲介のおかげで南ロシアに追放されただけですんだ。

この追放はプーシキンの詩的發展に重大な影響を与えた。詩人は四年の間オデッサやクリミア、そしてコーカサスを彷徨い、新しい中東の環境に刺激を受け創造力が豊かにされた。外面上の生活は浮いた話や恋愛、そして酩酊と孤独に満たされていた。道中ジプシーのキャラバンに出会い、彼らと共に行ってベッサラビア平原を走り回った。オデッサではギリシア人と手を取り合い、ギリシア独立戦争に関心を抱きギリシアの解放に関する情熱的な詩行を書いている。

だがこれら全ての冒険はプーシキンの魂に苦々しい沈殿物を残した。退屈に支配されていたのだ。そしてまさにこの危機的な瞬間にあって初めてバイロンを読んだ。このような魂にとってこの悪魔的なイギリス人の傲慢で絶望した、そして激しくて皮肉の籠った声が驚くべき印象を与えたのは当然のことであった。

プーシキンは擬古典的なフランスの典型から永遠に解放され、抑制の効かないバイロンのな芸技術の理解に激しく身を投じたのであった。この時代『コーカサスの虜』【Кавказский пленник】、『バフチサライの泉』【Бахчисарайский фонтан】、『ジプシー』【Цыганы】において、全ての主人公たちはバイロン化されていた。全員が高慢で、人間嫌い、恋愛を軽蔑して人間の痛みに対し冷酷な目を向け、横柄な悪魔的憂鬱に支配されている。

主に、私たちに当時のプーシキンの魂を明らかにしてくれる主人公は『ジプシー』のアレコ【Алеко】である。アレコは、迷信も指導者もなく自由に生きる道を求めながら、歴史と経済が強いられて広大なロシアの大地を彷徨わなければならなくなってしまった、不屈の迫害されたロシア人の典型である。社会が彼に与えることのできない独立と平静を自然の中に見出そうとしている。ジプシーたちと共に生き、ジプシーの女性を愛して結婚し、そして彼を欺いたが故に彼女を殺すことになった。

バイロンの英雄にどれほど近似していようと、アレコは農奴制と政治的抑圧が生み出した真のロシアの典型である。このロシア人は、絶望して自身の束縛を断とうと飛びかかるが、社会全体や全能の体制と戦うこと能わず、広大無辺のステップに自由を探し求め根無し草になって逃亡した。

この作品全体の中では、自然描写とベッサラビアのジプシーたちの生活の描写が傑出している。だが既にプーシキンは『ジプシー』からバイロンの軛を脱し始めていた。彼の「悪魔的な」主人公たちを批判的な皮肉に相対せしめたのだ。四年後、プーシキンはその時代の浪漫主義的精神という兵役を終わらせて、自分自身を解放したのであった。

プーシキンの浪漫主義的な主人公たちに対する皮肉の籠った雰囲気は、主要な作品の一つである『エヴゲーニー・オネーギン』【Евгений Онегин】の中でより顕著に見られる。形態は未だにバイロンのものを保っていたが、主人公は退屈し深い悲しみに沈んでいる。オネーギンはチャイルド・ハロルドの厳格な兄弟であったが、詩人は彼に自分自身を投影することなく皮肉をもって扱った。そうしてプーシキンは戯れの中で完全に解放されたのだ。当初『オネーギン』はロシア公衆を熱中させた。しかし新しい歌を発表していく毎に、浪漫主義から解放され技術の水準が高まっていくにつれて、プーシキンは叫びと抑えきれない衝動を欲していた公衆に失望していくこととなった。

『エヴゲーニー・オネーギン』はロシアで初めてのリアリズム主義的小説の大作である。しかし浪漫主義や恋の大冒険を待望していた非常に多くの同時代人たちは、偉大な批評家のベリンスキー【Виссарион Григорьевич Белинский】が後に「ロシア生活の百科事典」【Εγκυκλοπαίδεια της ρωσικής ζωής / Энциклопедия русской жизни】と命名したほどに、この作品がどれほどいきいきとした生気に満ち溢れたものであるのかを見て取ることができなかった。プーシキンは、正確さと愛情をこめて、地方の生、ロシア社会の極めて多様な典型を素晴らしく描き出し、そして日々の生に詩的煌きを与えたのであった。

オネーギンは彼の時代と社会階層の完全な代表である。多くの天賦の才に恵まれ、教養もあっ

て賢いのだが、意志というものがなかった。怠惰で無気力、余計者【άνθρωπος περιττός / Лишний человек】であったのだ。彼を好感の持ち得る者にさせるのは、本人が自分自身を余計者であり、社交界の生が虚無であることを識っているという点である。だが自分が軽蔑するこの生を諦めることも自分の存在に高次の目的を定める能力はない。突然の遺産によって田舎の土地所有者になるまで、悲嘆に暮れくたくたになりながらサロンを歩き回る。新しい地所に行ったがそこでも退屈に支配される。控えめで健全で、浪漫主義的な熱狂に犯されていないタチヤーナ【Татьяна Ларина】という娘に出会ったが、無駄であった。彼女に煌びやかな手紙を書いて彼の愛を告白した。しかし「自然性」を感じる能力が無かったので、彼はすぐに彼女を諦めた。自分自身が幸せになることも他人を幸せにすることもできなかった。

タチヤーナはかつて詩というものが生み出した中で最も感動的な女性の一人である。ロシア文学【φιλολογία】において初めて創造された偉大な典型である。男性に勝りより強い力を持つ並外れた女性であった。男性の前に大胆に進み出たこのロシア人女性の典型は、自己犠牲で強い力を有し、ロシア文学【φιλολογία】の中で高貴な役割を果たした素晴らしいロシア人女性主人公たちを生み出したのであった。

同時にプーシキンの外的生活も変化し始めた。友人に書いた手紙が秘密警察の手に落ちた。この手紙の中でプーシキンは無神論的な思想を支持していた。直ちに捕まって、プスコフ【Псков】近くのミハイロフスコエ【Μιχαήλοβσκoε】にある彼の母の地所に追放された。

南ロシアでの波乱に満ちた生活の後、プーシキンはついに強制された孤独の中で驚くべき平穏を見出したのだ。乳母である老婆に育てられた小さな村に閉じ込められていた二年間のおかげで、もはやオシオンやバイロンではなく、シェイクスピアやゲーテ、聖書とコーラン、そして古代のロシアの年代記を読む機会を得た。

その時から、プーシキンは国民文学【εθνική φιλολογία】に全身全霊を傾ける決心をした。読んでいた新しい本ばかりでなく、主に彼のロシアの民衆との直接的な接触が彼をこの決心へと後押ししたのであった。農民たちの耕作を追いかけ、彼らの話や物語、そして歌に耳を傾けた。北ロシアの単調で暗示的な風景、多くの実りをもたらす広大な平野、小さな湖、嘘にまみれた社交界の生から遠ざかった厳粛な平静、これらがプーシキンの魂に深い影響を与えた。

若き皇帝ニコライ一世【Νικολαΐ I】はプーシキンの天与の才を尊敬し、彼を追放から呼び戻した。しかしこの自由は極めて見せかけだけのものであった。警察が一步一步ごとに追尾し、彼が口にしたことに聞き耳を立てたり彼の手紙を取り上げて中身を検めたりしていた。多くの若者たちがこの名誉ある詩人を驚嘆の念をもって取り囲んだ。史学科教授のポゴーディン【Μιχαήλ Πετροβιτς Πογοδίν】がプーシキンの新作『ボリス・ゴドゥノフ』【Βορις Γοδουνοβ】を読んで受けた印象を語った。「この詩人は黒衣を纏い、波打つようなネクタイを身に着けていた。彼が書を読み始めた。私たちは、昔の詩人たちが今日まで私たちに習慣とさせていた神々のもったいぶった言葉の代わりに、突如単純で混ざりけの無い、充足した詩的言語を聞くことになった。初めの数幕はそれほど興味深くは聞こえなかった。しかし読み進めていくにつれ、私たちの感動は

大きくなっていった。修道士の独居房の章では、年老いた年代史家が若い修道士グリゴリー【Григорий】と会話するのだが、私たちは感動で我を忘れてしまうほどだった。そして神が自身の荒れた高慢な魂に休息をお与えになるよう修道士が祈る瞬間にプーシキンが達した時には、私たちは皆筆舌に尽くしがたい動揺を受けたのであった。熱で立ち止まる者もいれば凍り付く者もいる。私たちは飛び跳ねて叫びを上げ、もはや自分を押さえることができなかった。読み終わった時には、長い時間黙ったまま互いに見合っていた——終いにはプーシキンの抱擁の中に身を投げこみ泣きながら彼に接吻したものであった」

しかし、『ゴドゥノフ』の読書で狭い友人間のサークルを支配していたこの感動が広く社会にまで飛び火することはなかった。この高尚で均衡の取れた歌の素朴で人文主義的な調子は、大衆には月並みで異国的な物に思われた。この時代の感性の水準を越えていたのだった。

この歌はシェイクスピアの息遣いをもって書かれていて、芸術作品にもはや受動的で非人格的な大衆としてではなく、活力と判断力、そして力を持った者としての民衆を初めて導き入れた。人気のある主役たちの背後で民衆が重々しく振動し決断を下すのだ。

追放後に詩人が初めて手を付けた大作詩は『ポルタヴァ』【Полтава】である(1828)。この作品でプーシキンは再び多くの浪漫主義的な要素を導入した。裏切り者のマゼパ【Иван Степанович Мазепа】は友人の娘マリヤ【Мария Кочубей】を愛したのに見捨ててしまった。マリヤは彼に復讐するために、皇帝に彼の計画を訴えた。だがマゼパがマリヤの父親を誹謗者として売り渡していたが故に、皇帝はマゼパの方を深く信頼していた。マゼパは友人を獄に繋いで殺してしまった。マリヤは発狂してしまった。敗北を喫したマゼパがステップに逃げ出した夜、マリヤが姿を現し、狂った様子で自分の愛人に呪いをかけたのであった。

恐ろしいニコライ一世の「兵舎」においてプーシキンの魂は息をつくこともできなかった。プーシキンは忍耐した。そうして、彼の死の原因となった悲劇的な出来事が起こった—プーシキンはナターリヤ・ゴンチャロヴァ【Наталья Николаевна Гончарова】と知り合ったのだ(1828)。

ナターリヤは余りに美しく、恋の虜になったプーシキンは彼女に結婚を申し込んだが、この申し入れは冷淡に受け止められた。これを忘れようと詩人はコーカサス旅行を試み、トルコ人との戦争に参加して極めていきいきと『エルズルムへの旅』【Путешествие в Арзрум】でこの時代の生活について描写した。

帰還してニージニー・ノヴゴロド近くの父の地所に五か月間滞在し、そこで熱意をもって詩的創造を続けた。『オネーギン』を仕上げ、『けちな騎士』【Скупой рыцарь】、『石の客』【Каменный гость】、そして『モーツァルトとサリエリ』【Моцарт и Сальери】という悲劇の小連作、そして五つの感性豊かな短編、そして最後に技芸と成熟、そして才能の点で比べ得るものが無い程の抒情詩をいくつか書いた。

これらの詩は憂鬱な予感が息づいている。愛する可愛らしい美女には彼の不安を感じることはできないということはよくわかっている。だが彼は彼女の魂を造形してその理性を高く上げ、自分の作品を完成させるのに特に必要だった、平穏で家庭人としての生活を彼女と享受することを

望んだのだった。

これら全ての望みは水泡に帰した。プーシキンはナターリヤと結婚した。だがこの艶めかしくて皮相的でだが美しい女は、社交界の動きとたくさんいた自分の取り巻きから離れて生きることなどできなかった。しかしプーシキンの創作は、結婚一年目の頃は大いに進んだ。傑出した民衆的な物語を書き、長年彼に取りついていた英雄的人物——ピョートル大帝——を最終的に造形するために詳細に国家の文章記録を研究した。これらの研究から『青銅の騎士』【Медный всадник】が生まれた。

『青銅の騎士』はファルコネ【Étienne Maurice Falconet】の手になるピョートル大帝の最も有名な銅像である。詩の主人公はこの地上の象徴にまで高められ、ロシア民衆を馬のように飼い慣らし、彼が民衆に与えた統治に従うように強いた。

プーシキンのこの新しい作品には後に花開きロシア文学【φιλολογία】の中で身を結ぶことになる理想主義の種が多く見出だされる。『エヴゲーニー・オネーギン』がリアリズム小説の道を拓いたように、『青銅の騎士』もロシア文学【φιλολογίας】の理想主義的な小説における道を切り拓いたのだ。プーシキンはここではもはや忠実な詩人——現実の生を描く画家——ではなく、自分の創造力を解放して主人公たちを一般的象徴にまで形を変え変化させるのだ。私たちに外的な描写を見せるためだけでなく、生の本質を見せるために戦ったのだ。

文章記録研究の中でプガチョフ【Емельян Иванович Пугачёв】(1773-75)の恐ろしい革命に関する豊富な未刊行の逸話を発見し、その叙事詩を編んで物語を書きたいと思った。『大尉の娘』【Капитанская дочка】は彼の散文の傑作である。生気に満ち溢れた典型、傑出した田舎の描写、素朴さと叙事詩的壮大さ。どちらが右手でどちらが左手なのかも兵士たちに理解させることもできない、笑いを誘う守備隊の典型が輝かしく表現されている。プガチョフが農民反乱者と共に姿を現した時には、要塞にあった、子供たちが石や木、そしてぼろ布や骨を詰め込んでいたたった一つの大砲を掃除させることさえも躊躇するほどである。大尉の娘であるマリヤ・イヴァーノヴナ【Марья Ивановна Миронова】という主人公の人物像は感動的である。

このプーシキンの散文は、調和と単純さの奇跡である。人生最後の年月で、プーシキンは詩的散文への格別な愛に没頭し『エジプトの夜』【Египетские ночи】という小説の輝かしい断片を残している。

何度も試行錯誤した後、ついに季刊雑誌『同時代人』【Современник】の刊行許可を得た(1835)。このようにプーシキンの創作活動は苦々しい家庭人としての生活に加え、熱気を帯びた緊張の連続であった。自分自身が常に前進しているのだと感じていた。死去する少し前に友人の一人にこう書いている。

「今私は自分の魂が拡張し、最後には創作を達成することできるだろうと感じているよ！」

同時代の上流社会に属する者たちは、彼を揶揄うか或いは憎み、単に彼を美しい妻の夫か或いは危険で風刺的な舌としてのみ見なし、彼が消えて行く様を喜んで見ていた。

この彼らの欲求は瞬く間に成就された。オランダ大使の養子が、自分がプーシキンの妻の愛人

であったと吹聴した。あらゆる貴族が意地汚く喜んで詩人に匿名の手紙を送り、プーシキンも時折封筒に寝取られ夫の印を押した。絶望したプーシキンは対戦相手を決闘に呼びつけた。1837年1月27日に決闘が行われ、詩人は傷を負わされ雪の上に倒れた。見届け人たちが走り寄り、彼を起こそうとした。しかしプーシキンは彼らを制止し、叫んだ。「私にはまだ引き金を引く力が残っている！」プーシキンの弾丸は決闘相手の手に傷を負わせた。しかし致命傷を負った大詩人は家に運び込まれることになった。

二日後、恐ろしい苦痛の中でロシアの最も偉大な詩人がこの世を去った。上流社会は喜んだが、新しい知識人世代は指導者を嘆き悲しんだ。若き詩人レールモントフ【Михаил Юрьевич Лермонтов】は、苦々しく、怒りに満ちた詩行でもって失われた偉大な魂に告別した。

「偉大な詩人が名誉に服従し死んだ一人々に侮辱されながら倒れた——高邁な頭を起こした……——ランプの火が消えるかのように偉大な天分が消えた——勝利の花冠は萎びれた。そしてお前たちが、王座を取り囲む貪欲な暗闇であり——自由と偉大な天分と名誉に対する死刑執行人たちが、法の影に身を潜めている。——しかし神の正義は存在し、——恐るべき裁きは存在するのだ。心せよ、——黄金で買収できない——お前たちの考えと行いをよくご存知なのだ。——その時になって、また侮辱を始めても無駄だ——お前たちの汚れた血の全てでもって——かの詩人の名誉ある血を洗うことはできないのだから！」

#### 参考文献<sup>5</sup>

- Ιδωμενέως, Μ. (2006) Κρητικό Γλωσσάριο, Ηράκλειο: Βικελαία δημοτική Βιβλιοθήκη.  
 Καζαντζάκης, Ν. (1999) Ιστορία της ρωσικής λογοτεχνίας, Αθήνα: Εκδοσεις Καζαντζάκη.  
 Φιλίππιδης, Σ. (2017) Έξι και ένα μελετήματα για τον Νίκο Καζαντζάκη, Ηράκλειο: Βικελαία Δημοτική Βιβλιοθήκη.  
 福田耕佑 (2018)「翻訳 ニコス・カザンザキス (1999)『ロシア文学史』アテネ」『東方キリスト教世界研究』2: 32-60. 東方キリスト教圏研究会

#### \*謝辞

ロシアの人名や地名、及び書名などに関する日本語表記及びキリル文字表記に関しては、在カザフスタン共和国日本国大使館専門調査員でロシア文学翻訳家の横江智哉氏に助力いただいた。ここに感謝の意を表明する。

5 原著では参考文献は挙げられておらず、ここで示したのは訳注時に利用した参考文献である。